

海外平安文学 研究

ジャーナル 1.0

Journal of Heian Literature Research Overseas Vol.1.0



伊藤鉄也 編

<謝辞 Acknowledgement >

本研究は JSPS 科研費 25244012 の助成を受けたものです。

This was financed with JSPS KAKENHI Grant Number 25244012.



創刊の辞

平成 25 年 10 月に採択された科研「海外における源氏物語を中心とした平安文学及び各国語翻訳に関する総合的調査研究」（基盤研究 A：25244012）では、ホームページ「海外源氏情報」を公開して、調査研究と情報発信等の運営を推進しています。



「海外源氏情報」(<http://genjiito.org/>)

平成 26 年 3 月には、冊子版と共にウェブからのダウンロード版『日本古典文学翻訳事典 1』(<http://genjiito.org/aboutkaken/allresearchreports/>) を刊行しました。

これを受けて、研究誌の発行を検討していく中で、ホームページからオンライン版の〈電子ジャーナル〉を発行発信することになりました。

すでに ISSN 番号 (2188-8035) を取得



し、公開の準備は整いました。ISSN 番号とは、「International Standard Serial Number」（国際標準逐次刊行物番号）の略号で、日本では国立国会図書館が番号の登録や管理を行っているものです。

昨今、日本文学は「日本国内の文学」にとどまらず、「世界の中の文学」として位置づけられる時代となりました。世界中の人々と共に日本文学について考えていくために、本科研では各種情報を収集整理し、その成果は科研のホームページを通して発信し、更新しているところです。

オンライン版『海外平安文学研究ジャーナル』では、平安文学を中心に以下の内容を掲載します。

- (1) 研究論文
- (2) 小研究 (note)
- (3) 研究余滴 (column)
- (4) 翻訳実践

海外で平安文学を研究する方々は、どのような背景や環境のもとに日本文学の研究や翻訳をして来られたのでしょうか。また、研究していただけるのでしょうか。これは、日本において研究しておられる方々についても言えます。

そうした問題意識を持ちながら、翻訳を含めた多言語に対応した平安文学研究の意義や成果等を、世界各国の方々と一緒に考えていきたいと思えます。

こうした企画の趣旨をご理解いただき、次頁の【[原稿執筆要項](#)】に則った投稿でお力添えくださいますよう、この場を借りてお願いする次第です。

なお、ホームページにおける情報収集、整理、発信、更新や本電子ジャー

ナルの編集等は、本科研の研究協力者である浅川槿子（プロジェクト研究員）と加々良恵子（技術補佐員）が担当します。

2014年11月30日

日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (A)

「海外における源氏物語を中心とした平安文学

及び各国語翻訳に関する総合的調査研究」

研究代表者

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立大学法人 総合研究大学院大学

国文学研究資料館 伊藤鉄也

■『海外平安文学研究ジャーナル』原稿執筆要項■

本ジャーナルの原稿を募ります。平安文学に関する論稿等をお寄せください。

- 1 論文分量 400字原稿用紙換算で30枚以上（12,000字以上）
小研究（20枚以下）、研究余滴（10枚以下）、翻訳実践（自由）
- 2 原稿表記 原則として日本語表記・横書き
- 3 原稿締切 随時（応募希望者は、〈氏名・所属・仮題・簡単な原稿内容・パソコンのメールアドレス〉等を明記して、あらかじめ執筆意向を【itokaken@gmail.com】まで連絡のこと）
- 4 電子公開 毎年春・秋（予定）
- 5 体裁 A5版の版面を想定したオンライン画面
- 6 推奨版面 ・活字11ポイント、27行×34字詰、余白上下左右20ミリ
・フォントは、MS明朝、Times New Roman
・節ごとに小見出しを付す。
・注は版面ごとにそれぞれ下部にアンダーラインを引いて付す。
注番号は本文の当該箇所丸括弧（ ）付きの数字で示す。
（参考文献の書式例については、「海外源氏情報」内「海外平安文学研究ジャーナル」(<http://genjiito.org/journals/>)参照のこと）
- 7 原稿入稿 ワード文書またはテキストファイルをメールに添付して送付。
問い合わせ・送付先 【itokaken@gmail.com】
- 8 採否/校正 採否はメールで連絡。執筆者の校正は初校のみ。ただし、公開から1年以内に1度だけ改訂版に差し替え可能。
- 9 図版・写真など 掲載許可が必要な場合、原則として資料手配や使用料は執筆者の負担。図版・写真は、原稿枚数の中に含む。

目次

<u>創刊の辞</u>	伊藤 鉄也 3
-------------	---------

📶 研究論文

<u>スペイン語版『源氏物語』の評価と享受</u>	高木 香世子 9
---------------------------	----------

<u>『源氏物語』の「京都」はどう英訳されたか</u> <u>— 創造された京都と、変貌する『源氏物語』 —</u>	須藤 圭 37
---	---------

📶 小論文

<u>ベーネル訳『源氏物語』における和歌の翻訳</u> <u>— 英訳・仏訳との比較から —</u>	常田 槇子 58
---	----------

📶 翻訳レポート

<u>Traduttore traditore</u> <u>— イタリアが恋に落ちた『源氏物語』 —</u>	イザベラ ディオニシオ 69
--	----------------

<u>執筆者一覧</u>	77
--------------	----

<u>科研活動報告</u>	78
---------------	----

<u>編集後記</u>	82
-------------	----

<u>研究組織</u>	83
-------------	----

我もおとらしと思ひ
かほなる中に衛門督の
かりそめにたらしり給
へるあしもとにならふ人
なかりけり

*表紙・前扉・扉 人間文化研究機構・国文学研究資料館所蔵
『源氏物語屏風』「若菜上」巻の色紙
(金箔散下絵入の詞書、金泥彩色画／番号：ラ1ー18)

スペイン語版『源氏物語』の評価と享受

高木 香世子
(たかぎ かよこ)

◆1 スペインにおける日本文学の紹介

日本文学のスペイン語圏への紹介は、20世紀に入ってから主としてフランス語あるいは英語からの重訳で始まり、ラフカディオ・ハーン(Patrick Lafcadio Hearn)の『怪談』や新渡戸稲造の『武士道』、岡倉天心の*Book of Tea*などが出版され、幸いな事にこれらは現在にいたるまで再版され続けている。しかしながら、スペイン語圏で日本文学について話す場合の大きな悩みは、重訳という問題以上に、翻訳された作品の絶対数がなんとと言っても少なく、テーマがこれらの作品に限られてしまうことであった。21世紀に入るまでは、川端康成や大江健三郎のノーベル賞受賞、あるいは三島由紀夫のセンセーショナルな切腹事件によって起こった日本文学紹介の波に乗って、スペインにおいても紹介が行われて来たというのが否めない事実である。

しかし、こうした歴史的状況はここへ来て急速に改善されつつあると感じられる。近年のスペインにおける日本ブームもあって¹、過去十数年間にかなりの現代文学が原文からのものも含めてスペイン語へ翻訳されたが、この風潮は古典文学にも影響を与え、『枕草子』、『竹取物語』、『古今和歌集』、『風姿花伝』、『心中天網島』、そして2005年には『平家物語』と二つの『源氏物語』の全訳が、全く異なった出版社と翻訳家の手によってほぼ同時に出版されるに至ったのである。まるで、これまでの空白を埋めようとするかのようなラッシュとも見えないではない。さらに、『古事記』、『更級日記』の翻訳もこれに続いている。2013年にはやはりス

1 2013-2014年は日西交流400周年(支倉常長の慶長遣使節から数えて400年)を祝って両国で様々な文化事業が催された。

ペイン語圏のペルーで初の日本語からの翻訳になる『源氏物語』が出版された。これによって、スペイン語版『源氏物語』は完訳でないものも含めて現在までに4種類存在している。

◆2 4種類のスペイン語版『源氏物語』

本稿においては、こうした状況下にあるスペインにおける日本文学紹介の中で、はからずも同時出版となった二種類の『源氏物語』²と、1941年に早くもアーサー・ウェイリー (Arthur David Waley) の英訳と Kiku Yamata (山田キク) の仏訳を参考にしたもう一つのスペイン語版『源氏のロマンセ』³そして2013年に出版されたペルー版『源氏物語』⁴を比較し、翻訳の方法と日本文学の主たる概念の伝達がどこまで可能であるかを考察するものとする。

各翻訳における原作の理解度、受容度を検討するために翻訳者が底本とした他語の翻訳文、現代語訳テキスト、そして古典本文を参考として行うこととした。次に言語及び文化的問題の分析を行うが、この過程ではスペイン文学と日本文学の間には存在する類似性と差異が明らかにされるものとする。最後に、日本古典文学の最高峰とされる『源氏物語』がこれらの翻訳出版を通してどのようにスペイン社会において受け止められたかについても考察を試みるものとする。

四つの翻訳本と翻訳者は出版の年代順に次の通りである。

2 *La novela de Genji* (源氏の小説), traducido por Javier Roca-Ferrer, Barcelona, Destino, 2005-2006. *La historia de Genji* (源氏の物語), traducido por Jordi Fibla, Girona, Atalanta, 2007.

3 *El romance de Genji* (源氏のロマンセ), traducido por Fernando GUTIÉRREZ, palma de mallorca, Editorial Juventud (HESPERUS LUNAS), 1992.

4 *El relato de Genji* (源氏の物語), traducido por Hiroko Izumi Shimono y Iván Pinto Román, Qusqu, Fondo Editorial de la Asociación Peruano Japonesa (日本ペルー協会出版), 2013.

- (1) *El romance de Genji* (源氏のロマンセ)、1～9章(翻訳:フェルナンド・グティエレス)、1941年
- (2) *La novela de Genji* (源氏の小説) 巻1・巻2(翻訳:ハビエル・ロカ・フェレール)、2005-2006年
- (3) *La historia de Genji* (源氏の物語) 巻1・巻2 (翻訳:ジョルディ・フィブラ)、2005-2006年
- (4) *El relato de Genji* (源氏の物語)、1章～27章、(翻訳:ヒロコ・イズミ・シモノ、イヴァン・ピント・ロマン)、2013年

◆3 翻訳者の見解

ここでは上記翻訳者が各々どのような理解と意図の基に作業を行ったのかという問題を探り比較することとする。

3.1 Romance de Genji (以降、『源氏のロマンセ』)

『源氏のロマンセ』は1941年にウェイリーの英語版とKiku Yamataの仏語版からフェルナンド・グティエレス(Fernando GUTIÉRRE)がはじめの9章をスペイン語に訳したものであり、2005年に完訳が出るまでは、『源氏物語』といえば、この本を指していた。題名のロマンセは、第一義はスペインの中世からバロック時代まで隆盛であった韻文の形式で、昔の伝説や物語の伝達に好んで使われたものを意味する。また、第二義としては、一過性のロマンスという意味もある。

翻訳者は序文の中で、『湖月抄』やウェイリーの翻訳を参考にすれば、Relato de Genji(源氏の話、物語)という題名がふさわしかったと認めているが、なぜかロマンセを使用している。ここに編集者などの意図もあったと考えることができよう。すでに使用されなくなった韻文形式を意味するロマンセを題名に入れることで、作品の古さや時代を示唆しようとしたか、あるいは、単純に源氏の恋物語という解釈をしたという考え方も成り立つであろう。

4 頁の短い序文では、平安京を「王女達の都」と名付け、小野小町の「花の色は、、、」をその代表的な詩人の短歌と呼んで紹介している⁵。紫式部の生い立ちや『紫式部日記』への言及があるが、知識としては表面的なものに止まっている。また、『源氏物語』がどのようにして書き始められたかという縁起について、伊勢の巫女が、中宮彰子に依頼したという話や、石山寺の源氏の間話を紹介しており、続けて、仏教の信者のために書かれたのではないか、という仮説も紹介している。

翻訳文はウェイリーの古めかしい言葉遣いを上手にスペイン語に訳し、当時の読者には十分読み応えのあるものとなっているが、残念ながら、冒頭の9章のみの紹介に止まり、全体を予想させることもできない制限がある。この点について全く断りのないところを見ると、ウェイリーの初めの翻訳本をそのまま訳したもので、その後ウェイリーが引き続き翻訳を続けて完訳したこととは、無関係であったことが惜まれるところである。

3. 2 La novela de Genji (源氏の小説)

『源氏の小説』は30頁に渡る翻訳者自身による解説の前にハロルド・ブルーム (Harold Bloom) による序文があり、プルーストの『失われた時を求めて』との比較から、止むことの無い主人公の愛の探求を、紫式部が表現しようとした「欲望の輝き」だと定義し、作者の皮肉なパトスの世界が、スペインの哲学者 Miguel de Unamuno (ミゲル・デ・ウナムノ) が発見した『ドン・キホーテ』の深淵さと比較できるものとして、世界文学の中での位置付けを行っている。

解説は、「黄昏の平安」、「作品」、「作者」、「本書の翻訳について」という小見出しで区切られている。まず「黄昏の平安」、では平安時代をとりまく日本史の説明を世界史との比較で行い、フランスのルイ14世のベルサイユに匹敵するような世界であったろうと読者の想像力を喚起

5 和歌という名称が使用されていないことは注目に値する。海外では和歌よりも短歌を時代に関係なく好んで使用する例が多い。

するが、平安遷都の年代を 789 年としたり、世界文明との比較においては、エジプトやペルシャ、インド、ローマ帝国などを挙げ、そのめまぐるしさについて行くことは至難の技と言わなければならない。また、平安時代の一般市民はこの千年の都とはほど遠い、ニューギニアの原始人にも近いような暮らしをしていた⁶、といった乱雑な比較をしており、これらは、日本人として読むに耐えない部分と言わざるを得ない。しかし、それにもましてここでの一番の問題は、400 年続いた平安時代をまるで一つのまとまった時代のように扱っていることである。天皇の覇権が崩壊し、貴族による摂関政治が横行した時代、という歴史書の見出しのみで『源氏物語』の世界を理解しようとするには、かなり無理があると言えるであろう。

次に「作品」についての解説では、セルバンテス、トルストイと双肩する世界文学の傑作であると定義し、英文学におけるシェークスピアやギリシャ文学のホメロスがそうであったように、この後の全ての日本文学はこの作品に負っているとす。その後、作品のあらすじを 3 部に分けて紹介し、1～33 章、34～41 章、42～54 章という伝統的な分け方を紹介している。ここで、ルネ・シフェール (René Sieffert) がその訳において、ヨーロッパの小説の主人公がたどる典型的な、自己確立、勝利、衰退、滅亡というプロセスをなぞる形で前半を“Magnificence” (栄華)、後半を“Impermanence” (うつろい、無常) としたのを受けて、ここでは、第一部 (1～33 章) を“Esplendor” (栄光) とし、第二部 (34～54 章) を“Catástrofe” (破局) とすることとした、と言う。第二部の破局については、この翻訳者特有の強調的な表現で、原作の流れと比較して疑問が残るところであろう。

『源氏物語』を意識的に「源氏の小説」と名付けた理由として、半世紀を超える時代の流れの中に、100 人を超える登場人物を抱え、現実

6 前出 2 p.22

よりもより現実的なフィクションを過去、現在、未来という時間軸の中で自由に操作しながら縦横に語ってみせる作者の技量は、世界初の小説と呼ぶにふさわしい作品だと確信しているからだと述べる。さらに、これまでの評論や研究にも触れて、フェミニスト理論、マルクス論、モラル論、仏教、フロイトの理論から見た源氏などを紹介するが、結論として、作品理解のためには、ユダヤ・キリスト教的西洋の先入観を捨てて作品世界に浸る必要性を解いている。こうした翻訳者の態度は必要かつ無難と判断できるところではあるが、実際の文章においては、西洋の読者を強く意識するあまり、原作とはほど遠い短絡が行われている部分や、付け足しも多く、意識の高い読者にはかえって鼻につく結果をもたらしていることは残念である。

作者紹介については、特記すべき点は見当たらないため、これを省略し、ここで問題にしている「本書の翻訳について」見ていくこととしよう。まず、全ての翻訳はオリジナルの再創作であると定義をし、スペイン語から遠い日本語からの場合は、よりそうした要素が多いとする。これは、多かれ少なかれ実践に基づいての意見と取れるわけだが、この後に続く日本語の難解さや西洋で伝統的に判断されている日本語の文法論などは時代錯誤が甚だしく、この解説文の中で最も非難されるべき部分と思われる。いわく、日本語は昔から中国語やインド・ヨーロッパ語の精密さからほど遠い言語であり、19世紀の西洋人は、日本語は抽象的な考えを表すことのできない原始的な言葉であると見ていた。1870年頃日本に滞在していたフランス人の George Bousquet⁷ (ジョルジュ・ブスケ) によれば、「日本語には関係代名詞が欠けており、そのために言葉の連結と意味が明らかでない。従属を示す言葉、「が」、「にもかかわらず」などが節の末尾に来るため、主文と従属文の関係が逆になり、我々にとって重要な情報は日本人の頭の中では二次的な位置を占めるようである。

7 前出2 巻1, p.43. George Bousquet: "Le voyage au Japon", *Anthologie de textes français 1858-1908*, p.723, ed. Patrick Beuillevaire, Editions Robert Laffont, S.A, 2001

話の筋を理解するためには非常な努力が必要で、そのために日本人は、常に頷いたり、「hé」という間投詞を言葉の切れ目に入れるという習慣ができてきているのだ。」と引用している。ここで、「hé」と言っているのは、「ね」の誤りであろう。こうした日本語の難解さを証明すべく、翻訳家は日本語と英語の差を問題にしたラフカディオ・ハーンという言葉の借りたり、三島由紀夫は自分で校正した英文からしか翻訳を許さなかった、という伝説めいた話題も提供しているわけだが、残念ながら日本語を解さない訳者の愚痴とも受け取られざるを得ない。ただし、平安時代の日本語を解説する折の困難を列挙するに当たっては、「固有名詞がない、主語が不明で理由無く文の途中から変わる、現在、過去が一緒くたになり、肯定文、否定文、疑問文が区別できない、複雑な文法だが語彙は限定されていた。」といった、一部を除いては、大方賛同できる一般論を披露している。

こうして引出される結論は、日本文学は意識でなければならない、というもので、ウェイリーが行ったように、内容を伝えるためには、解説的な加筆と削除が必要だと断定している。しかしながら、「この翻訳ではウェイリーの息の長い、和歌も対話も叙述文の中に入れてしまう、プラムケーキのようなごたまぜ文を直して、句読点をわかりやすく入れた。」と言い、さらに、ウェイリーが説明なく削ったり簡略化した部分は、他の翻訳文を比較しながら補足した、とも言う。いずれにせよ、原文との読み合わせのない点については言及がないことが不満として残るが、翻訳上の努力が良く伝わってくる部分でもある。

さてここで、翻訳者は参考としたこれまでの翻訳文につき、いくつかの批評を行っているが、これらは彼の仕事に対する態度を決定する上で意味を持つと考えられるところから、かなり短縮した表現ではあるが、すでに述べたウェイリーを除いてその批評を見ることとしよう。まず、ベンル (Oscar Benl) については、ゲルマン調の文体とし、和歌の翻訳が特に際立っているとす。次にサイデンスティッカー (Edward

George Seidensticker) については、その逐語訳調が時々わかりにくい、シフェール訳は、注釈がなく、和歌にいたっては全く理解できない、マツカラー (Helen Craig McCullough) 訳は、部分訳ではあるが美しい文体だと褒める。最後に、アイヴァン・モリス (Ivan Morris) 訳については、疑問点を解くのに役立ったし、特に呼称、肩書きの問題で参考になった、としている。

一読しての印象は、彼が最も大切とした事は、文の流れ、小説の流れであり、「雨夜の品定め」を冒頭に取り出して、序章とする決断も、彼の理解する『源氏物語』としてはふさわしい始まり方だと言うことになろう。解説の最後に、「注釈を文中に入れ過ぎると煩わしさが増えるため、文化ノートを各章の終わりに加えた。源氏は歴史物語ではなく、小説として書かれているため、こうした説明を補足する必要がある。[…] 黒沢や小林、進藤の映画を見るようなつもりで、読んでいただきたい。丁度スペインの古典を読むに当たって、カルメンのオペラをみるような感覚を呼び起こしながら読み進んで欲しい。」と、結んでいる。果たして、各章に追加された文化ノートが彼の目指す小説の流れを妨げていないかどうかは疑問が残るところであるが、ほぼ 2000 頁にも及ぶ長編を、いかに飽きさせずに読ませるかという一つの工夫としては、成功した編集ということもできるであろう。ただし、これはあくまで出版事業から見た判断であり、内容は日本研究者の校閲のない、時としていかにも乱暴な結果であるということも付け加えておく必要があると考える。

3.3 *La historia de Genji* (『源氏の物語』)

『源氏の物語』については、特に翻訳者の手による記述はないが、翻訳後記として本人からいただいたコメントと他の出版物からその内容をまとめることとする⁸。

これまで英文から吉川英治、大江健三郎、三島由紀夫を翻訳したが、

8 Jordi Fibla, "Historia de Genji" (源氏の物語), *Vasos comunicantes* 6, p.27-37, 2007

21世紀の現代スペインで日本文学が誇りとする傑作である『源氏物語』を原文から訳さず、英文に頼ったことについて、それを許すような出版界をも含めて自己批判を行っている。但し、文芸評論家についてはさらに手厳しく、上記の現代文学を重訳することには寛大であったものが、岡倉天心の *Book of Tea* を英語から訳した折には、これが日本語から訳されなかったことを批判するような無知蒙昧をさらけ出しており、いまだスペインの日本文学に対する知識が少ないことを嘆く。

タイラー (Royall Tyler) の翻訳に関しては、2002年に雑誌『タイムズ』にのった書評から興味を持っており、実際にはウェイリー訳とサイデンスティッカー訳も参考にした。タイラー訳については、新聞等での評価の通り、現時点で最も原文に忠実な信用の置ける翻訳であることを意識し、さらに、大江健三郎が語っているように、「『源氏物語』はダンテの『神曲』が書かれる三百年前に存在した」という条件を満たす、即ち、その時代を想定する上で無理のない語彙と表現に徹するというを前提として翻訳を進めたとしている。しかしながら、稀少ではあるが、タイラー訳とは異なった語彙を用いた点も認めている。例を引けば、源氏が紫に向かって言う、“darling” が、果たして平安の人間関係にふさわしいかどうか。あるいは、「帚木」の巻の式部丞の体験談の中で博士の娘が、「月ごろ風病重きにたへかねて、極熱の草薬を服して、、、」⁹とあるところ、タイラーはこれをラテン語の *Allium sativum* (ニンニクの学術名) としたが、平安時代の会話としては、あまりにも違和感があるとして、*un brebaje que contiene polvo del bulbo de fuerte olor*¹⁰ (匂いの強い球根の粉を煎じた飲み物) と訳した。また、和歌の翻訳については、タイラーの試みた 5,7/5,7,7 の形式を、大きな努力とは評しながらも、時として形式が内容を犠牲にする危険性があるのではないかとの疑問を提起し、英文と西文の違いを考慮すると、このリズムを保つことは到底無理

9 『新編日本古典文学全集 20 源氏物語 1』p87、阿部秋生・今井源衛・秋山虔・鈴木日出男校註・訳 (小学館、2002)

10 前出 2 p73

であり、意味を正しく移すことに徹したとしている。

3. 4 *El relato de Genji* (『源氏の物語』(ペルー版))¹¹

日本とペルーの国交 140 年を記念してペルー日系人協会出版部より第 1 ～ 37 章までを第一部として発行された。翻訳者はペルーの外交官及び日本文化史専門家であるイヴァン・ピント (Iván Augusto Pinto Román) 氏と、比較文芸芸能史の研究者である下野泉氏の二名である。出版説明書によれば、女の立場から叙情を良く映し出している与謝野晶子の口語体で書かれた『源氏物語』と、最も原作に忠実な版として、小学館の大島本を底本とした解説付き日本古典文学全集の『源氏物語』を翻訳テキストとして使用したとある。

冒頭に諏訪春雄氏と藤原克美氏による短い前書きがあり、それぞれ「源氏物語のテキストと挿絵」、「源氏物語に描かれた愛」と題して作品への招待を行っている。その後、下野氏による前説があり、世界に類を見ない女流文学の隆盛とその中での傑作の誕生を次のような要素に分けて説明している。第一に、すでに三世紀頃から大陸から渡って来た多くの外国人との混血による、クリオーリョ¹²文化が日本に存在したこと、第二に女性による仮名文字の使用、第三に言霊信仰の存在、さらに異文化を融合した日本文化の創造を挙げている。作者の紫式部は、これら全てを宮中の生活の中で十分に吸収し、人類に共通する「無常」の問題を扱っ

11 ここでスペイン語訳の *historia* と *relato* の両者を「物語」と訳す理由について解説する。前者は広義に叙述文を指し、この中にはある時代のある人々に起こった出来事をフィクションとして書き記したものも含まれる。一方後者は、主として口承で伝えられ、記述される出来事、語り物語を指している。このため、後者を選択する本意は作品のナレーターとその語り口に当たる文体を意識したものだと言することができる。また、*relato* は通常あまり長くないお話、物語を意味することもあるので、複数にした *relatos* とする方が正しいのではないかという意見もある。これは各巻がある意味で独立した話の展開をみせる源氏物語においては適当な意見だといえる。

12 通常 *Criollo* は中南米へ渡ったスペイン人を親に持つ人種を指して言うが、この場合は主として中国と朝鮮半島から渡って来た人々との混血を意味していると考えられる。

た作品を書き上げたとしている。この作品をより良く理解するためには、日本文化が本質的に多神教的共存を重んじるものであり、一神教的な解釈による異質なものの除外と、それへの対抗といった立場をとらないことを知って欲しいと述べている。

翻訳の方法としては、原文に忠実な文章を旨とするが、これによって流麗な原文のスタイルと作者の文学的資質、さらに思想的な深淵さを損なうことのない文体を目指したと言う。また、物語をとりまく平安時代を理解させるために、10世紀末の貴族社会の日常と雰囲気を伝達する目的で600に及ぶ注釈を付した。これは、融合の美、繊細な美といった日本文化独特の概念を伝えるためであるとし、これにより、当時の社会の中で生きた女性達の闘いと悲しみを表現しようと試みているとしている。

冒頭の数章を一読した感想としては、スペイン語の文体は全体的に練れた表現で口語体ではあるものの、古めかしい語彙や言い回しを駆使して昔物語の体を示していると言える。注釈は、タイラーの詳細なケースに近い心配りがあるが、読み進む上でそれほど大きな支障とはならないと言えよう。和歌の翻訳では常に5行に分けて、5,7,5,7,7を意識させようという意図が見える。これはタイラーが、上の句と下の句の二行に分けているのと対照的と言えるであろう。和歌のスタイルはさらに擬古文体的であり、全体としてまとまっている。以下、この点については4つの翻訳を比較することとし、もう少し詳しく見て行きたい。

◆4 翻訳者の見解

四つの翻訳文は概ねスペイン語として難解なものではなく、通読することが可能な現代文である。しかしながら、これまで見て来たようにそれぞれが独自の作品理解と翻訳意図に基づいて翻訳をしていることから、(1)の源氏のロマンセは正統派的、(2)の源氏の小説は再創作的、(3)の源氏の物語は学術的、そして最後のペルー版(4)は、初の原文からと

分類することができると思う。その根拠は次の通りである。

4.1 『源氏のロマンセ』

すでに記述したように、ウェイリーの文章をロマンセというスペイン文学の古い形式に疑似させようとする意図があり、この意味で成功している文章であると言える。ウェイリーが、当時の上流階級が読み慣れていた英語のスタイルを使用したことは知られているが、これは長文の中にふんだんに形容詞を組み込んだ美文であり、『源氏物語』の翻訳には第一義的に適していたということができよう。しかしながら、ウェイリーが理解しえなかった部分や省略した部分は、そのままスペイン語に反映されており、翻訳家の自由な解釈による表現も多く見られる。

4.2 『源氏の小説』

4つの翻訳本の中で最も物議を提出するものである。翻訳者は、作品の導入部分という建前で『雨夜の品定め』と呼ばれる部分を抽出し、第一章「桐壺」の前に出している。いくつかの書評に書かれたとおり、文章の流麗さ、ドラマチックな演出という要素に重きをおき、理解を促すために強制的な表現をふんだんに駆使することによって、原作の持つ詩的で暗示的な要素を排除してしまっている。『源氏物語』を西洋の長編大衆小説に変換すれば、このようになるとも言えるであろう。使用語彙に関しては、スペインの日刊紙 ABC の書評欄に載った言葉を引用すれば、「1000年前の遠い東洋の国の王宮で起こった出来事が、まるで今日のバルセロナの繁華街やマドリードのチャンベリ地域で使用されている語彙で表現されている」¹³ということになる。この他、文化的解説部分は多くの誤解と事実と反するデータがあり、これを編入したことが惜しまれる。

13 Juan Malpartida, La gran novela de Murasaki Shikibu(紫式部の一大小説), ABC(Diciembre 3), 2005.

4.3 『源氏の物語』 (ロイヤル・タイラー版から翻訳)

ロイヤル・タイラーが10年の年月をかけて、日本文学の専門家として翻訳した英語版をスペイン語に訳しているが、その誠実な翻訳の方法をスペイン語版もよく反映している。注釈は日本語版よりも詳しい場合があり、西洋の読者を対象として解説されている。登場人物の多さと三世代にわたる物語の時間的長さという問題は、練れた叙述の技法によって乗り越えられているという評価が一般的である。しかしながら、和歌や詩文を織り交ぜた叙述テキストが、時として十分その美しさを伝えていないくらいがあることも確かである。タイラーは和歌を英語のプロソディーに当てはめて上手に訳しているが、これをさらに韻を踏んでいないスペイン語に訳した場合、原文の和歌と大きく異なる印象を与えることは否めないであろう。

4.4 『源氏の物語』 (ペルー版)

原文の洗練された文体と、古めかしさをいかにして現代スペイン語で表現するかという点で、この翻訳は良い例であるといえることができる。原作に忠実な語彙の探索は、ほとんどの場合成功していると思われるが、例外もないわけではない¹⁴。擬古文体に慣れていない読者には、当初文体が少し堅苦しい、あるいは古めかしいと感じられるかもしれないが、読解に問題は見られない。古典スペイン語の尊敬語第二人称 vos を使用することによって、英語などの二人称が一つしかない言語と比較すると、より原文のスタイルに近い表現を可能としている。また、原文を意識した4、5行にもわたる長文を駆使しているにもかかわらず、それほど違和感がないことも評価できよう。また、特別な語彙や表現についての注釈は底本を良く参考としてかなり綿密に行われているが、読者を原

14 第一章「桐壺」で桐壺の更衣の死後、母君が帝の娘への執着を嘆かないではいけないという場面で、(本文は「…かへりてはつらくなむ、かきこき御心ざしを思ひたまへられはべる。…」(前出9 p30.)) 翻訳は「…そして、かえって帝の思し召しを残忍なものと思わざるを得ません。」(前出4 p 42.) とし、“crueldad”(残忍)という語を使用している。スペイン語であっても語感としては強調され過ぎていると思われる。

文とその文化に近づけるためには必要不可欠のものとする。

◆5 日本古典文学の翻訳における問題点

これまで、日本古典文学をスペイン語へ訳した経験のある翻訳者が多く口にするのは、日本文学は暗示と感情表現を常とする文学であるので、翻訳は意識にするべきであるという意見である。また、アーサー・ウェイラーもハビエル・ロカ＝フェレル（Javier Roca-Ferrer）も同じように宣言している。しかしながら、意識を許容する以前に、基本となる古語文法や表現の学習、当該テキストに先立つ古典作品に対する深い造詣がなければ良い意識もすることはできない。日本文学の一つの特徴とも言うべき先行作品への頻繁な言及や本歌取りなどにみられる暗示法は、こうした基本的な知識に裏付けられない限り、正しい意味を解き明かすことは不可能と言える。これは狭い宮中とその周辺に属する者のみが暗黙の中に共有していた古い定型表現や、ものを書くおり、歌を詠む時に自由自在に駆使した、必要不可欠な知識を現代の読者へ提供するという意味を持っている。重訳や原文からの翻訳においても、このことは忘れてならない点だということができる。

『源氏物語』のように、作者が女性であると断定できるものは、前提として宮廷に使えていた、女官達の上品で教養のある話し言葉の文体を意識しなければなるまい¹⁵。現代においても日本語には、男ことばと女ことば、そして書き言葉と話し言葉と呼ばれる異なったスタイルが存在する。その意味で、平安時代の女房達の物言いは、どのようなものであったのかを知らなければならないし、これを反映するためには、どのような表現が正しいかを検討する必要がある。これは、当時の朗読に近い歌の読み方や小グループでの読書の仕方などが、頭に浮かばなければな

15 Ariel Stilerman が試みた「桐壺」の翻訳と朗読はこの意味で一つの試みと言うことができる。<http://revistatokonoma.blogspot.com.es/2013/07/lectura-genji-noticia-enviada-por-ariel.html> (28.9.14 参照)

らないのと同類である。したがって『源氏物語』の翻訳は、宮廷に出仕していた教養の高い女房の語り口をスタイルとして、翻訳するものと定義して良いのではないだろうか。現存する四つの翻訳が果たしてこの範疇に入るものであるかどうかは、これまでの分析で明らかになっていると思われる。

日本の古典を外国語へ翻訳する場合の共通するもう一つの問題は、人称代名詞の問題である。日本語の文章における第一人称に限らず全ての主語の省略は、外国語へ翻訳する場合の大きな難題といえる。コンテキストによって明確になるものもあるが、ほとんどの場合は、長文の中で誰が主語であるかと読み解くことはそれほど簡単ではない。『源氏物語』では、敬語表現一般が登場人物の上下関係を示していると同時に、物語の語り手と登場人物の間の関係も示唆している。しかしながら、ほとんどの外国語ではこのような現象は起こらない。その意味で、外国人が日本の古典テキストを読解する場合、最も大きな困難を経験する部分である。スペイン語はこの点、現在は使用されていないものの、少なくとも古い文体では *vos* という尊敬語にあたる二人称が存在しており、今日でも一般的に理解をすることは可能である。現代語では、第一人称の *yo*、第二人称の *tu* と *usted* (丁寧語) と三種類を使用することが可能であるが、*vos* を使用することによって擬古文体を創造し、さらに登場人物を文脈に合わせて扱うことが可能となる。従って四つの翻訳のうち3つまでが *vos* を使用している事実は、その理由があると言わなければなるまい。

◆6 翻訳文の比較

ここでは、「桐壺」の中で娘の死を嘆く母君と帝の使いとして訪れる鞍負の命婦のやり取りの部分の翻訳を比較することとする。方法としては、原文の解釈とスペイン語の解釈を並列し、分析しようとするものであるが、4つのスペイン語の翻訳文の訳戻し文を対象として利用するも

のとする。これによって、各翻訳文が原文をどのように理解し、スペイン語の文章としたかという点が明らかになるものと考える。

原文は、小学館の『新編 日本古典文学全集』から引用¹⁶する。

原文：

命婦 鈴虫の声のかぎりを尽くしても長き夜あかずふる涙かな
えも乗りやらず。

母君『いとどしく虫の音しげき浅茅生に露おきそふる雲の上人
かごともきこえつべくなむ』と言はせたまふ。

(1) 『源氏のロマンセ』¹⁷

… Se hacía doloroso alejarse de aquellos herbazales, y la joven, poco deseosa de paretir, recitaba el poema:

… かの草むらから離れることはつらく感じ、若い女は去りがたく、詩を読んだ：

Sin descanso,

como la voz eterna de los grillos reales,

hasta el amanecer, toda la noche,

he llorado.

休みなく続く

鈴虫の永遠の声のように

夜明けまで、一晩中

泣いたことよ

Y contestó la anciana:

これに老婆は答えて：

Sobre las hierbas que se visten

de mil cantos de insectos

cae dulcemente el rocío

de las lágrimas de un Morador del Cielo.

千の虫の音で

覆われた草ぐさの上に

静かに落ちる

天上人の涙の露

16 前出9 p32.

17 前出3 p21-22.

(2) 『源氏の小説』¹⁸

…Myobu se despidió con un poema: 命婦は詩で別れを告げた：

La noche de otoño es demasiado breve	私の涙の限りを流すには
para contener todas mis lágrimas	秋の夜はあまりに短い
por más que el canto de grillo	たとえ鈴虫の音が
insista en romper el silencio.	静寂を妨げようとしても

Era un poema de despedida al que contestó la abuela con otro:
この別れの詩に祖母は答えて：

Triste es el canto de los insectos	虫の音は悲しく
entre las cañas,	竹やぶの間に響く
pero más triste resulta todavía	だがなお悲しいものは
el rocío que cae de las nubes.	雲間から落ちる露

(3) 『源氏の物語』¹⁹

Myobu, reacia a subir al carruaje, recitó un poema:

命婦は車に乗りあえず、詩を読んだ：

Los grillos cascabel pueden cantar hasta cansarse, mas en mi caso
no es así,
pues durante la noche interminable mis lágrimas caerán sin cesar.
鈴虫は疲れ果てるまでなくことができる、しかし私の場合はそうで
はない、
なぜなら終わることの無い夜をかけて私の涙が流れ続けるから。

18 前出 2 p91.

19 前出 2 p43.

La anciana le respondió: No tardaría en culparte.

老婆は答えた：あなたを責めざるを得ませんね。

Aquí donde los grillos cantan, cada vez más desdichados, en las escasas hierbas,

tú que moras por encima de las nubes traerías un rocío aún más denso.

ここになく虫達は、まばらな草むらでより不幸になって、
雲の上の住人のあなたはより多くの露をもたらすことでしょう。

(4) 『源氏の物語』(ペルー版)²⁰

El relato de Genji (p. 43)

Si afanarme yo debiera,	なく鈴虫のごとく
Igual que el grillo-campana,	声を限りの
Con mi más fuerte quejido,	哀号ができるなら
Noche otoñal no bastara	秋の一夜は足らぬ
Para terminar mi lloro.	我が涙のつきるには

Exclamó ella, aún no pudiendo resolverse a subir a su carruaje.

と、彼女は嘆き、車に乗ることもできずにいる。

Sobre los carrizos de la morada,	茅の葉を
donde de los insectos	苦しみの叫び声とともに
el chillar angustiado sube,	昇り行く虫のしげしい庵に
triste el rocío vierte	悲しみの露を注ぐ
la noble dama de sobre las nubes	雲上の淑女よ

20 前出4 p 43.

“No os haría yo reproches”, la madre encargó a su doncella lo dijera a Myōbu.

「そなたを責めることはいたすまい」と、母は小間使いに命婦への伝言をした。

ここで本来の和歌の翻訳についての分析をする前に、この場面に出て来る人称代名詞の問題を取り上げなければなるまい。『源氏の小説』(2)では、桐壺の更衣の老いた母を「祖母」と呼び、また『源氏の物語』(3)では老婆と呼ばれていて、帝の使いである鞍負の命婦と近い関係で使用される tu で呼び合っている。この親しさは、この物語の上で起こる出来事や動きに常に付き回っている儀礼の表現から、少なからず遠く離れた雰囲気を作り出してしまふ。したがって読者は、叙述されている世界とは全く異質な世界を想像することになるのであろう。

『源氏のロマンセ』(1)で鈴虫と呼ばれる虫は、涙が落ちる「降る」という意味と鈴虫がなく「振る」という掛詞「ふる」と繋がっている。命婦は娘を失った母の悲しみに同情して、秋の長夜をなき通す虫のように自分の涙もつきるところを知らないと言う。この和歌の正しい意味を汲み取っている翻訳は、(1)と(4)である。(3)では鈴という言葉を使用して、原文の比喻表現に近づこうという姿勢が見られるが、私見では「…しかし私の場合はそうではない、なぜなら終わることの無い夜をかけて…」といった表現が、あまりにも叙述文的で原文の詩的雰囲気を伝えていないと思われるからである。一方(2)は、虫の音と涙の関係を断ち切ってしまう、夜の静寂を破るものとして使っている。

返歌では、高位の女官を貧しい館へ招き入れた母が恐縮している様子が見てとれるが、同時に微妙な非難の意味が組み込まれている。思うように手をかけられない屋敷の庭には雑草が生い茂り、秋の虫の音が響いている。そこへ天上人である命婦を迎えるという恥ずかしさも感じさせる。そしてその雑草の上に落ちる高貴な人の涙は一層母の悲しみを深

いものとさせるというのである。

(1)で Morador del Cielo (天上人)と訳されている人はいわゆる殿上人、即ち輓負の命婦の意味なのであるが、(2)では「雲間から落ちる露」として、意味を取り違えてしまっている。一方、(1)は誰を指すかは定かではないが、天上人、天に住む人という表現はしているものの、その後に来る原文の「このようなお恨み言をも申し上げたくなりまして」という部分を省略してしまっている。(3)の場合は「あなたを責めざるを得ませんね。」と訳したが、culpar (責める)という動詞があまりにも強いニュアンスである。また同時に“tú que moras por encima de las nubes traerías un rocío aún más denso”(雲の上の住人のあなたはより多くの露をもたらすことでしょう)という訳は、命婦の涙がなお一層、母の悲しみを誘うのだということを意味しているのか不明である。6.4については、その洗練されたスタイルから、和歌については全体として正しい解釈と翻訳が行われていると思われるが、ここで使われた「叫ぶ」という動詞 el chillar は、angustiado「悩ましい」という修飾語によって意味を付け加えてはいるものの、平安時代の和歌の語彙としてはあまり適切な表現ではないと判断できる。「いとどしく」という副詞は、虫がひどく鳴いているという増大語としての意味を持つが、母の返歌ではその音が雑草に囲まれて暮らす者にとってはもっと強く感じられるという、悲しい心の涙をも暗示しているということができよう。その意味で、単に虫がひどく鳴くという行為を指すのではなく、母の心情に合う語彙が選ばれるべきであったという感じが否めない。さらに、返歌の後に来る言葉は、No os haría yo reproches (そなたを責めることはいたすまい)となっており、原文とは正反対の表現になっている。原文では、母は命婦の涙を見るにつけても、さらに悲しさが増すのだという恨み言をどうすることもできないと言っているのである。したがって、この翻訳文では二人の女性の間に関わされた繊細なニュアンスの和歌でのやり取りは、異なった意味合いのものとなってしまったと言わざるを得ない。

最後に、和歌の翻訳においての 5,7,5,7,7 というプロソディーを他の

言語でも踏襲すべきかどうかという問いについては、ここでの細かい議論は避けるが、タイラーが試行錯誤の末にそれを試みたように、私はある程度の考慮は必要だという意見である。少なくとも、詩の意味が伝わると同時に、注意深い語彙の選択などにより詩的な雰囲気やリズムを伝えることは、適切な翻訳の態度であると考えられるものである。

◆7 スペインにおける源氏物語の受容

『源氏のロマンス』（1）についての書評は、すでに出版時からかなりの時間が経過してしまっているため、比較対象となるものが見当たらないが、2005年と2006年に続けて出版された二つの翻訳及びペルー版については、その評価を追うことができる。ただし、これはスペイン国内におけるものに限るため、中南米で発表されたものについては、これらを含んでいないことをここに断っておきたい。

まず第一にほとんどの書評は、これまで砂漠のような印象のあるスペイン語による日本文学の紹介に『源氏物語』が加わり、やっと自国語で日本叙述文学の傑作を読むことができるようになった喜びを冒頭に記している。そこでは、11世紀の初頭に世界でも類のない女性の手による本格的小説が書かれたことを述べ、さらにこの作品がスペインの『ドン・キホーテ』にも匹敵する傑作であり、マルグリット・ユルスナール (Marguerite Yourcenar) やオクタビオ・パス (Octavio Paz) 等の世界的作家達が、いかに『源氏物語』を絶賛したかという言葉を用いている。しかし、二つの出版社がほぼ同時期に、同じ作品を豪華本の装丁で出版したことに關しては、偶然の一致なのか、あるいは知っながらの競争意識の現れであろうかとの感想も聞かれた。私見を言えば、当事者はすでに進行していた他社のプロジェクトを途中で知った可能性が強く、読者としては「不思議に幸せな読書の秋」²¹に遭遇したという感じ

21 Carlos Rubio, *El yin y yang de las letras japonesas* (日本文学の陰と陽), *EL PAIS*(Noviembre 26), 2005.

ではないだろうか。ただし、これだけの長編でしかも古典文学である作品を2社が選んだ背景には、スペインにおける日本文化ブームが明らかに反映されているといえるだろう。

これら2種の翻訳について、いくつかの書評が最も大きな障害として掲げている点は、どちらも原文を見ずに、あるいは原文から直接翻訳されたものでないことである。デ・ビリェナはこうした状況を憂うべきものと評して、これまでのスペインにおける東洋文学の翻訳活動を痛烈に批判している。

「スペインは、今では遠い昔とはいうものの、かつて宗教的圧迫と政治的孤立に甘んじた国であった。当然多くの外国文学作品は翻訳の翻訳というものに頼っており、その多くはフランス語からの重訳であった。[...] しかし、現代において東洋文学をその昔と同じように扱うことは許されるべきことではない。すでに、20年間細々とではあるが、日本、中国の古典を原文から翻訳する事業を行っている出版社も存在しており、予算や採算の問題を考慮に入れるとしても、スペイン文化は、たとえ素晴らしい動機に基づいているとしても、このようないい加減な仕事に停滞してはいけいないのだ。[...] 近年続いている日本文学の出版は、Tao-sushi という寿司屋のチェーン店の繁栄と似ているのかも知れない。しかし『道』の字は日本語では、タオという発音ではないはずだ。皆さん、原文から訳そうではありませんか。それが文化というものです。」²²

他の書評では、二つの翻訳はどちらも読む価値のあるものであるが、常に原文との差をどこかで疑いつつ読む他はないだろうとの意見もある。そして、残念ながら、現在のスペインにおける東洋研究のレベルが、いまだこうした傑作を原文から翻訳するには至っていないのではないか

22 Luis Antonio de Villena, Traducciones exóticas (エキゾチックな翻訳) *EL MUNDO*(Noviembre 23), 2005.

と見ている²³。スペインで日本文化を講義する筆者にとっては耳の痛いところであるが、現実として、ブームに先走る出版状況と、時間をかけた丁寧な翻訳との狭間にある研究者もいることを強調しておきたい。

後で見るように、作品の理解、表現、文体に渡って二つの翻訳は大きく異なっているが、いずれの文章もスペイン語の文学という枠でくくった場合、読みにくさ、あるいはほとんどない違和感というものを与える文ではないというのが大体の書評で共通している。しかしながら、文学の翻訳本来の問題を提起し、さらに平安時代の日本語の表現から、いかに遠い東洋の11世紀の宮廷世界を理解するのかという疑問をなげかけている評論もある²⁴。一方では、作品に現れた繊細な心理世界が、スタイルや芸術、詩歌、音楽によって表現されることの美しさを挙げ、そうした表面の動きがいかに人間の深い心理と繋がっているかを鑑賞できるとして、『もののあはれ』の解説を行なっているが、日本語の古文の翻訳による思考や感覚というものは、まるで暗号を解いているような困難を伴い、紫式部の描いた世界に自分が入り込むような錯覚は到底あり得ないのではないか、また反対に、だからと言って読者として全く手の届かない世界に置かれていると感じることも錯覚といわねばならない、としている。

次に『源氏物語』を解説するにあたって、いくつかの評論ではこれまでスペインでは見られたことのない物語文学への言及が行われている。これらのいくつかを挙げてみる事としたい。それは、一般的な読者に与える情報としては、かなり突っ込んだ日本文化の解説とも取れるものであり、評論をする人々がすでにこうした知識を他の書物から得ているこ

23 Clara Janés, La historia de Genji (源氏物語), *EL MUNDO*(Noviembre 24), 2005.

24 José Enrique Ruiz-Domenec, Mono no aware, Un viaje al corazón de la sensibilidad Heian (もののあわれ、平安の繊細な心への旅), *LA VANGUARDIA*(Noviembre 23), 2005.

とを窺わせる点で、興味深いということができらるだろう。

現代詩人としてすでに確立した地位を得ているクララ・ハネス (Clara Janés) は日本文学を読み込んでいる知識人の一人だが、書評の中で、源氏を他国の作品と比較する意味があるだろうか、と問う²⁵。作品を構成している全ての要素はすぐれて日本的なものであり、他の文化に移し替えることは不可能だと考えている。紫式部の表す「もののあわれ」という美的感覚は、あれほどの長編で保持することは非常に難しい感覚的なものであるにもかかわらず、全編をとおして、東洋的な一筆であらゆる複雑さをまとめてしまう表現力によって全体性を貫く事に成功している。また、詩歌と切り離すことの不可能な叙述文もこれに貢献しているだろう。当時の女性の目を通した貴族社会とそこにうごめく人間模様が、時々覗くユーモアを通して読者を引っ張って行く、としている。さらに日本の最も重要な古典といわれる作品が、11世紀に女性によって書かれたという事柄を他の国の状況と比べることに問題があるという意見である。それは、日本文学の発生期における女性の口承文芸への貢献から解き明かされねばならず、その流れを汲む文才に富んだ女官達が平安時代の宮廷に集められて、文芸や和歌の指導を行っていたのだとし、他に類をみない女流文学の隆盛もこうした歴史的過去を鑑みる必要があるとしている。また、マドリードの大学で日本文学を講義しつつ古典を翻訳し続ける Carlos Rubi も、物語文学の起源を解説し、口承伝達による語り物が、主として女性の語り部達の口を通して伝承され、狭い宮廷社会でも女性達のサークルで好まれ、語り継がれていったものだろうとしているが²⁶、両者共に、筆者が2004年に出版したスペイン語版『竹取物語』²⁷の解説において、日本の作り物語、即ちフィクション文学形成においていかに女性がその中心的な役割を果たしたかという仮説を発表

25 前出 23 Clara Janés.

26 前出 21

27 高木香世子, *El cuento del cortador de bambú* (竹取物語) p15-179, Madrid, Editorial Cátedra, 2004

した事を受けて、これを引用していると思われる。

前述のように、外国の書物と比較することに異議を唱える評論もある中、新聞のサブタイトルには一様に世界文学の傑作に匹敵する作品だとして、プルーストの『失われた時を求めて』をその例に挙げるものが多い。しかし、いくつかの評論では、極端に洗練された箱庭に植えられた植物のように、外界とは遮断されているものの、すべての細部までが優雅で包まれ、人間の最も深い心理状況は繊細な和歌の言葉で表現されるという特殊な宮廷世界の物語としては、ルイ 14 世のパリの文化と比較するほうが、正しいのではないかと問うている。ここで例に挙げられている作品は、17 世紀後半に生きたラ・ファイエット夫人の *La Princesse de Clèves* (クレープの奥方) である。11 世紀の平安京と 17 世紀のベルサイユを比べることが、すでに『源氏物語』の先行性を裏付けるものとなるわけだが、そこで語られる女性の目から見た密やかな宮廷内部における人間模様は、感情や情緒、内的思考を中心とする小説、エッセイ、日記というジャンルに発展していったことにおいても、類似点があると言うのである²⁸。

さらに続けて、今日の日本文化の魅力は、この時期に形成され、後の時代に享受された美学的要素に負うところが大きいという視点も示している。それは、繊細という感情のあり方だとも言う。『源氏物語』に見られる個の表現が、他との共存の中でいかに感動を与えうるかという、西洋にはまれな回りくどさから自我の統制へと動いていく驚きを述べている。

日本がヨーロッパで語られる時、20 世紀初頭のジャポニズムとそれに伴うエキゾチズム趣味はいまだ健在であるといわざるを得ない。しかし、そのもっと奥深くに見え隠れする平安の雅がどのように理解されて行くかは、こうした評論を目にすると、『源氏物語』の翻訳が果たす役

28 Chantal Maillard, *Genji en "deshabillé" (半裸の源氏)*, *EL PAIS*(Noviembre 26), 2005.

割がいかにか大きいものであるかを、改めて感じさせるものである。

さて、2005年に同時出版となった二つの翻訳文についての評論に移ろう。多くの書評を發表している詩人マルパルティエダは、タイラー訳について、日本の宮廷世界を写しだすために、その語彙の注意深い選択、叙述文としての明快さを掲げて、複雑な人間関係が淀みなく流麗に語られているとしているが、和歌の翻訳に関しては両者共に再考の余地があるのではないかとともに言う²⁹。一方、『源氏の小説』については、読者の側に立った翻訳だとし、できる限り簡潔に現代語で読みやすさを第一とした文章であるとしている。しかしながら、そこにはいくつかの問題もある。第一の問題は、自分の解釈でできる限り簡潔にしようとするあまり、解説的な文章が多く加筆されていることや、回りくどくなることを避けて「刈り込み」作業を多く行っていることであるが、これは柵上げにするとしても、原文の優雅さをかなり損なうと思われる強調文が多用されていることを批判している。暗示されているものを明示していると言う事であろうか。即ち、広くせつやかな読者を想定した脚色が行われているのである。第二には、表現と語彙の問題が挙げられる。あまりにも現代の街頭で聞くような言葉使いと語彙を使用し、今から10世紀の昔に遠い東洋の国の宮廷で起こった出来事が、まるで大都会で煩雑な会話を聞くような感覚を呼び起こすとしている。しかしながら、翻訳者はこの危険性を十分承知の上で作業を行っているはずで、作品についての知識には膨大な読書と下調べがあったことが窺えるとも言う。

『源氏の小説』の語彙については、もう一つの書評が時代遅れのフランス語の語彙の使用を批判している³⁰。例えば、「雨夜の品定め」の場面では、この部分を前章として孤立させ、源氏が読み物をしている様子で *deshabillé* (半裸で、あるいは部屋着で) というフランス語で表している。

29 前述 13

30 前出 28 Chantal Maillard.

原文ではずっと後になって、源氏がくつろいだしどけない格好をしているという表現があるのだが、ここでは *deshabillé* の一言が斜体で書かれており、どのような状況を指しているかが良い意味でも悪い意味でも一目瞭然である。この他にも、トワレット、リエゾンなど、日本でも良く使われる外来語表現が多用されているが、スペイン文学におけるこうした仏語の使用は、その昔、知識人がそのステータスを示すために好んで使用した経緯があり、時代遅れのきどった語彙という感覚が否めないのである。この部分をタイラー版の翻訳と比較した批評家は、「一体この二つの作品は同じものなのかどうか、疑わしい程だ。」と言い、この翻訳は、あくまで脚色された作品として見るべきものだとしている。また同じように、状況解説の加筆や翻訳家の自由な判断による「刈り込み」、そして、特に作品の構成まで変えてしまう大胆さに、読者として原作に近い翻訳を読みたいという希望を妨害されているような反感さえ起こさせると手厳しく批判している。

以上見て来たように、2005 年を境に長編『源氏物語』の2つの翻訳文が同時に発表されたことは、日本文学のスペイン語圏における紹介としては、大きな出来事であったとすることができるし、また転換期であったとも言うことができよう。それは、これ以降の日本文学出版が主として、日本語から翻訳されることが飛躍的に多くなった事実をみれば明らかである。そうして2013年に、ペルーの日本ペルー協会が移民140周年を記念し、日本語からの翻訳を出版するに至る。最近新聞の読書欄でこの出版が紹介されたが、他の翻訳と比較して原文に基づく唯一の翻訳本としてこれを読者に勧めたいとしている³¹。

本書の評価については、未だ半ばであり詳細な分析を今後に待たねばならないが、ペルーでの限定版ではあるものの、今後の日本古典文学のスペイン語圏における紹介に一石を投じたとすることができるであろう

31 Luis Antonio de Villena, *Decadencias Genji monogatari* (衰退 源氏物語), El Mundo(Septiembre 7), 2014.

う³²。

(マドリード・アウトノマ大学准教授)

32 本稿はスペイン文部科学省の学術プロジェクト援助 proyecto i+d FF12011-25897 MINECO の活動として執筆された。

源氏物語の「京都」はどう英訳されたか — 創造された京都と、変貌する源氏物語 —

須藤 圭
(すどう けい)

◆1 はじめに

いま、ここにある、源氏物語とは何か。わたしたちが手にとり、わたしたちが読む源氏物語とは、いったい、どのような存在であるのか。それは、膨張し、変貌した源氏物語だ。本稿では、源氏物語の、こうした様態を捉えてみたい。

源氏物語は、あまたの日本文学のなかでも、異質なほどに凜とした、きらびやかな輝きを放ちつづけている。日本というひとつの地域にとどまらず、世界にまで広く波及し、その外国語訳も多くが刊行されている¹。そこで、本稿では、これらの外国語訳のうち、試みに、1925年から1933年にかけて刊行されたアーサー・ウェイリー英訳の *The Tale of Genji* を具体例としてとりあげる。そのことばを見つめながら、源氏物語の世界へ分け入ってみることにしよう。

◆2 源氏物語のなかの「京都」

ところで、源氏物語は、「京都」を舞台にした物語である、と考えて、ひとまずは、誤りない。物語執筆の場所としても、享受者たちが生きた空間としても、そして、物語を支える舞台としても、源氏物語における「京都」は、極めて至要な位置を担っていた、ということができる。

その「京都」を、源氏物語がかたろうとするとき、それは、次のこと

1 伊藤鉄也編『海外における源氏物語』（国文学研究資料館、2003）には、11種類の言語による源氏物語の外国語訳が紹介されている。なお、伊藤鉄也氏のご教示によれば、その後の調査によって、32種類の言語が確認されている、とのことである。

ばとともに立ちあらわれてくる。

【A】物語本文 玉鬘巻 上 pp.524-525

「… いつしかも京に率て奉りて、さるべき人々にも知らせ奉りて、御宿世に任せて見奉らむにも、都は広き所なればいと心安かるべしと思ひ急ぎつるを、此処ながら命さへ堪へずなりぬること」と後めたがる²。

夕顔の遺児である玉鬘は、乳母に伴われて筑紫へ下るものの、その乳母の夫である太宰少弐が、重い病にかかってしまう。如上の場面は、もはや、命も短いと知った太宰少弐が、「筑紫で生きてきた玉鬘を必ず「京」へ連れていき、しかるべきひとに伝えて庇護してもらい、広い「都」で適当な相手をさがしてもらおうと思っていたのだが」と、玉鬘の境遇と自分じしんの不甲斐なさを悔やんでいるところである。ここからは、まず、源氏物語の「京都」が、「京」「都」ということばによってかたられている、と知ることができる。

また、太宰少弐は、【A】の嘆息の直後、三人の息子たちに「たゞこの姫君京に率て奉るべきことをおもへ」（上 p.525）という遺言を残してもいる。「玉鬘を必ず「京」にお連れしなければなりません」と要請しているわけだが、その「京」ということばは、いくらか伝わる写本や刊本のうち、大島本や陽明文庫本、首書源氏物語によるものであって、たとえば、国冬本を見てみると、このところが「宮こ（都）」になっている。「京」と「都」は、写本や刊本のあいだの本文異同のなかで、ときに、入れ替わることを許容する。「京」と「都」が、おおよそ、同じ

2 物語本文の引用は、校註国文叢書(1-2)『源氏物語(上巻一下巻)』(博文館、1912)に依り、巻名・頁数を示し、私にゴシック・波線・傍線を施した。以下同じ。凡例を取めないが、巻末広告によれば、底本は首書源氏物語である。なお、現代の用字法によれば、「京」と書いて「みやこ」と訓ませることもあるが、源氏物語の写本に立ち戻ってみると、「京」は「京」「きやう」、「都」は「都」「宮こ」「みやこ」と書かれており、混同はされていないようである。

意味あいであったことも確認しておこう³。

しかし、「京」と「都」の二つのことばがかたられる、それじたいから浮かびあがってくることは、この二つのことばが、意味の重なりはあったにせよ、互いに異なるフレーズでもあった事実には他ならない。そして、それを裏づけるように、「京」「都」の差異に関するいくつかの考察も報告され、そのどれもが、説得力に富む⁴。

池田亀鑑⁵も、この差異にふれたひとりである。もっとも、その訴えようとするところは、「京」と「都」の違いではなく、「要するに平安時代の文献にあらはれる…「京」「きやう」「みやこ」「都」「宮こ」等は、すべて皇居のあらせられる土地、即ち皇都としての平安京をさしてゐるのであつて単なる都会をさしてゐるものは一つもない」とか、「みやこ」又は「京」といふ言葉が、皇居の御所在地以外には絶対に用ゐられることはなかつた」などと述べることにある。「皇室に対し奉る忠誠心」「皇居を讃美し、その御風格を景仰してやまぬ赤子としての真心」「夾雑物を除去した純粋な日本の心」ともいうから、国粹主義のきらいはあるけれども、上代以来の用例を丁寧に収集しながら導かれた、「京」も「都」も皇居の所在地以外に用いられない、という指摘は、再三再読されてよ

3 参考として、落合直文『日本大辞典 ことばの泉』（第21版・大倉書店、1904（明治37年））を掲げておく。

きやう〔名〕京。みやこ。みさと。源「三月のつごもりなれば、きやうの花ざかりは、みな過ぎにけり」（p.427）

みやこ〔名〕都。『みやこ（宮処）の義』天皇のおはします土地の称。首都。万「雲雀あがるはるべとさやになりぬればみやこもみえず霞たなびく」（p.1317）

4 小町谷照彦氏「都」（『国文学 解釈と教材の研究』28(16)、1983.12）、神尾暢子氏『王朝文学の表現形式』「京師規定の表現機能」（新典社、1995／初出・原題「源語京師の空間規定—共通素材の類義表現—」（『学大国文』32、1989.2））、今西祐一郎氏『源氏物語覚書』「みやこ」と「京」—平安京の遠近法—（岩波書店、1998／初出・新日本古典文学大系20『源氏物語 二』岩波書店、1994）、神谷かをる氏「源氏物語における「都」と「京」（京都光華女子大学日本語日文学科編『京都と文学—京都光華女子大学公開講座—』和泉書院、2005）参照。

5 池田亀鑑「皇国文学の特性としての「みやび」の意義」（『日本諸学』5、1944.12（昭和19年））、同「特殊語彙に反映せる国民の忠誠心—「みやこ」の語義について—」（『国語と国文学』22(5)、1945.9（昭和20年））。引用は、すべて、後者に依る。

い。

ところで、その延長として、「都」は「屢々都会性などと考へられてゐる」ものの、そうではなく、「わが国の「みやこ」は、支那の「都会」でもなければ、まして西欧諸国の「都市」^{シテイ}でもない」とも説いている。池田亀鑑としてみれば、「都」の外国語訳を、中国語で「都会」としてみたり、英語で「city」としてみたりすることは、批判の対象になったのだろうか。時代も場も文化も異なるのだから、平安時代のことばの意味あいと、翻訳のことばの意味あいとが別ものであることは自明であるはずなのだが、ときに、それらを糾弾することだけを目的にした議論に出くわして戸惑うことがある。おそらく、池田亀鑑も、そうした瑣末な問題をとりあげることにはなかつたろう。

だが、ここに示されているのは、源氏物語とその外国語訳のあいだに横たわる断絶だけではない。とはいうものの、この物語は、多くの言語に翻訳され、たしかに、読まれつづけているのである。源氏物語が翻訳される時、この断絶のなかで、物語を彩っていくことば、形づくられていく世界こそ問われなければならない。源氏物語は、「京」「都」の、少なくとも二つのフレーズをもって「京都」を書きあらわそうとしてきた。はたして、その外国語訳は、どうであったか。

◆3 「the Capital」ということば

源氏物語の外国語訳のひとつ、ウェイリー英訳のなかの「京都」は、次のようにあらわれてくる。

【B 1】物語本文 若紫巻 上 p.108

三月の晦日なれば、京の花盛はみな過ぎにけり。

【B 2】ウェイリー英訳 Murasaki p.80

It was the last day of the third month and in the Capital the blossoms had all fallen.

それは三月の最後の日のことであり、そして、**都**では花がすっかり散っていた。

若紫巻の始発、病を患った源氏が、北山の聖を訪れようと決めたのは、三月も終わりのことであった。「京の花」がすっかり散ってしまっていたという「京」の訳語として、「the Capital」が選ばれている。

それでは、この「the Capital」は、いったい、どのようなことばとして機能しているのだろうか。次の例を見ていくと、「the Capital」は、帝の住む皇居がある場所を指し示すことばであった、と分かってくる。

【C 1】物語本文 若紫巻 上 p.123

君はまづ内裏に参り給ひて、…

【C 2】ウェイリー英訳 Murasaki p.91

On his return to the Capital he went straight to the Palace …
彼が**都**に戻ってくると、彼はまっすぐ内裏に向かって…

また、同時に、卑しく辺鄙な場所と対比されるどころであった、とも分かってくる。

【D 1】物語本文 若紫巻 上 p.110

近衛の中将をすて、申し給はれりける司なれど、かの国の人にも少しあなづられて、何の面目にてかまた**都**にも遷らむと言ひて、頭もおろし侍りにけるを、…

【D 2】ウェイリー英訳 Murasaki p.81

For a time he was an officer in the Palace Guard, but he gave this up and accepted the province of Harima. However he soon quarreled with the local people and, announcing that he had been badly treated and was going back to the Capital, he did nothing of

the sort, but shaved his head and became a lay priest.

彼は宮中の警護を担当する官職の将校だったときもあったが、これを投げだし、播磨国を引き受けた。しかしながら、彼は、すぐに、地元のひとびとと口論になり、ひどい扱いだ、都に帰る、といいながら、そうしたことは何もせず、しかし、彼の頭を剃り、そして、入道になった。

「the Capital」は、【C】で「the Palace」とともにあって、皇居のある場所を指示することばであったし、【D】で「the province of Harima」と対峙させられ、鄙びた土地と対極にある、華やかな場所をあらわすことばでもあった。

◆4 「Court」ということば

宮中や宮廷を意味する「Court」も、「京都」としての性質を読みとってよいばあいがある。

【E 1】物語本文 蓬生巻 上 p.397

都にかはりにける事の多かりけるもさまざまあはれになむ。今のとがにぞ、ひなの別れに衰へし世の物語も聞え尽すべき。

【E 2】ウェイリー英訳 The Palace in the Tangled Woods p.320

“At Court there have been great changes, many of them for the worse. Some day when I have plenty of time I must tell you of my exile and the strange outcast life we led on those deserted shores. ...”

「都では、大きな変化があり、それらの多くは悪く変わってしまいました。いつか、十分な時間があるとき、わたしは、あなたに、わたしの流離と、わたしたちがあつた寂れた海岸で過ごした異様な放浪者としての生活を話さなければなりません。…」

惟光が露払いをしながら、源氏は、荒れはてた末摘花の邸を訪れる。源氏と末摘花が会うのは、源氏が須磨に退去して以来のことであったというから、おおよそ、三年の月日経っていたころになるうか。その年月をふまえながら、源氏は、自分じしんが不在の「Court」も変わってしまったのだ、とかがたっている。

さて、ふつう宮中を指すこの「Court」は、物語本文の「都」に対応することばとして用いられているわけだが、もちろん、たんに、ウェイリーが、物語本文の「都」は「京都」でなく宮中を指していると誤っただけだ、と考えることもできる。しかし、物語本文が「さまざまあはれになむ」としているにもかかわらず、ウェイリー英訳が「there have been great changes, many of them for the worse.」として「changes … for the worse」（悪化している）と書いることは、事実以上に、荒れた邸に住み続けている末摘花に対する源氏のおわれみを読みとったのであろうし、そうだからこそ、「Court」は、決して、宮中だけでなく、二条院に残してきた紫の上をはじめ、「京都」での諸事を勘案しての発言であった、と捉えておくべきであろう。物語本文で「都」と「鄙」が明確に対比させられているのと同じように、ウェイリー英訳において「Court」と、それに対する「my exile and the strange outcast life we led on those deserted shores」（わたしの流離と、わたしたちがあれ寂れた海岸で過ごした異様な放浪者としての生活）が置かれていることも、看取しておきたい。「Court」は、「the Capital」とともに、「京都」を表現することばのひとつといえる。

ただ、それを認めたらうで、なお、「the Capital」とせずに「Court」と書かれていることから、「京都」が、宮中を中心としながら構成された場所として、描きだされようとしている点を読みとっておかなければなるまい。

◆5 「the City」ということば

ウェイリー英訳には、次のようなことばも、見いだされる。

【F 1】物語本文 若紫巻 上 p.121

内裏よりおぼつかながらせ給へるもかしこければなむ。今この花のをりすぐさず参りこむ。

宮人に行きてかたらむ山ざくらかぜよりさきにきても見るべく

【F 2】ウェイリー英訳 Murasaki p.90

“ … I hear that my father the Emperor is making anxious enquiry after me. I will come back before the blossom is over.” And he recited the verse, “I will go back to the men of the City and tell them to come quickly, lest the wild wind outstripping them should toss these blossoms from the cherry bough.”

「… わたしは、父の天皇が、わたしのことを心配する質問をしている、と聞きました。桜が終わるまえに戻ってきましょう」そして、彼は歌を詠んだ。「わたしは都のひとびとのところに帰り、そして、急いで来るように伝えましょう、彼らを追い越した荒々しい風が、桜の枝から、この花を散らしてしまうといけませんから。」

北山に籠もって病の治療をつづけていた源氏のもとには、帝からの便りがとどくこともあった。快方に向かっていたこともあり、「京都」へ帰還しようとする源氏は、対面した僧都に名残惜しくかたりかける。帝をはじめ、多くのひとびとがわたしを心配している、だから、いまは彼ら「京都」のひとびとのもとに戻るけれども、すぐに彼らを連れて戻ってきましょう、と。「the men of the City」（都のひとびと）の待つ、その「the City」は、「my father the Emperor」（源氏の父である帝）の住まう場所であると認められる。「the Capital」と同じく、皇居をもつ場

所として、「the City」は、ある⁶。

「the City」には、「the Capital」に認められた二つの特徴のうちのひとつ、すなわち、皇居を抱えこむ場所を意味していることが、まずは、たしかめられる。さらに、残されたもうひとつの属性も、把握することができる。

【G 1】物語本文 椎本巻 下 p.407

都にはまだ入りた、ぬ秋の気色を、音羽の山近く風の音もいとひや、かに、槇の山辺も僅に色づきて、…

【G 2】ウェイリー英訳 At the Foot of the Oak-Tree p.829

In the City there was as yet no sign of autumn. But as he approached Mount Otoha there was a cold touch in the wind, and on the slopes of the Maki Hills the leaves had already begun to change color.

都では、まだ、秋の兆しはなかった。しかし、彼が音羽の山に近づくにつれて、風は冷たく感じられ、そして、槇の尾山の斜面では、すでに、その葉は色を変えはじめていた。

中納言となった薫が「京都」から宇治へ参上するこの場面には、「京都」から、「京都」に程近い音羽の山、そして、宇治にある槇の尾山へと、徐々に紅葉の進んでいく様子が叙述される。「京都」から、宇治という「鄙

6 英訳のなかに見られる敬語的表現をさぐった武田孝「『源氏物語』の敬語とその英訳—桐壺の巻のウェイリー訳を中心に—」（古田拡・高杉一郎・武田孝・松永巖『源氏物語の英訳の研究』教育出版センター、1980）は、「Emperor」や「Palace」といった帝や内裏にかかわることばが、固有名詞でないため、はじめの一字を大文字で示さなくともよいにもかかわらず、敢えて、大文字にして表記されていることをとりあげ、「Waleyの訳文の中には、伝統的な習慣であり、固有名詞であるから当然だ、という解釈をも承知した上で、なお、王室およびそれに関連のある人や事物に対する敬意が、強く示されているように思われる。」(pp.266-267)と述べている。武田孝は掲げていないけれども、「the Capital」や「the City」も、このひとつに加えておくことができるだろうか。

へ向かう薫の行程に、「都」と「鄙」を対置させる構図が見え隠れしていることは明らかである。

さて、そうしてみると、「the City」と「the Capital」は、相互に入れ換えることができる、ともいえるのだが、しかし、すべてのばあいにおいても可能だ、と断言することはできない。たとえば、次の場面は、どうか。

【H 1】物語本文 明石巻 上 p.348

立ちたまふ暁は、夜ふかう出でたまひて、御迎の人々もさわがしければ、…

【H 2】ウェイリー英訳 Akashi p.277

On the day of his departure he was up long before sunrise. The setting out of so large a party (for the house was now full of friends who had come to escort him back to the City) occasioned a tremendous bustle.

彼が出発するその日、彼は、日の出よりずっと前に起きた。とても大きな一行の出発は（というのは、いまや、その家は、彼を都まで護衛するために来た友人たちでいっぱいだった）、すさまじい賑わいを引き起こした。

帝から帰京の宣旨があり、源氏が、いよいよ、明石を去ろうとする折のことである。ウェイリー英訳は、物語本文と比べて、いっそう具体的に、ひとが溢れるほどの邸のさまであった、と補っている。源氏を迎えに集まったひとびとの騒々しいすがたをはっきりと描き出すことで、源氏を希求する強烈な勢いを感じさせてくれる。

帝が源氏の帰京を求めた背景には、朝廷の後見として、政治を任せようとする意図もあった⁷。しかし、ウェイリー英訳が、迎へのひとびとを

7 このことは、物語本文（上 p.345）にも、ウェイリー英訳にも見ることができる。ウェイリー英訳では、「There were so few people to whom it would

「friends」と書いているように、源氏を待つ友人たちが住み、源氏を連れて帰ろうとする場所は、その帝も、朝廷も、政治も、すべてが不在であるはずだ。そこは、「the Capital」として、帝の意向を浮かびあがらせるよりも、「the City」として、源氏そのひとを求める、風雅で洗練された「京都」のありさまが描写されるべきところなのである。

すなわち、入れ換え可能であるかのように思われた「the Capital」と「the City」のあいだには、はっきりとした溝があった。どちらも優々たる空間を示しながらも、「the Capital」が皇居という存在に規定されているのに比べて、「the City」は、それに束縛されていない。「the City」は「the Capital」よりも、もっと広いものなのである。先に引用した池田亀鑑が述べていたように、源氏物語の「京都」は、「京」「都」の使い分け、あるいは、その他の筆法によって、多少の差こそ生じても、そこが「京都」である以上、帝のいる皇居から自由になることはない。しかし、ウェイリー英訳において、「the Capital」でなく「the City」が「京都」を指し示すことばとして書かれたとき、源氏物語に描かれた「京都」は、帝や皇居のイメージから切り放され、拡大している、といえるのだ。

◆6 「town」ということば

ウェイリー英訳の源氏物語における「京都」は、ときに、「the Capital」や「Court」であり、ときに「the City」であった。しかし、「京都」は、このいずれかのことばとしてかたられるばかりではない。さらに、異なることばを見いだしていくこともできる。

be in any way possible to entrust the affairs of government that it seemed a pity Genji should be out of the running. His presence was indeed becoming in every way more and more imperative, and at last the Emperor decided to recall him, whether Kokiden approved or not.」(政治の仕事を任せることができるひとはほとんどいなかったので、源氏が候補に挙げられないことを苦しく思った。彼の存在は、じっさい、あらゆる意味で、いっそう必要になっていたし、そして、最終的に、帝は、弘徽殿が賛成しようがしまいが、彼を呼び戻すことに決めた。) (p.275) とある。

浮舟は、いったん、宇治の中の君が住む二条院に移るものの、そこで
匂宮の接近を許し、三条の小家へと逃げるように退いていく。

【I 1】 物語本文 東屋巻 下 p.628

かやうの方違所と思ひて、ちひさき家設けたりけり。三条辺に
ざればみたるが…

【I 2】 ウェイリー英訳 The Eastern House p.997

The place that the mother had chosen for her “retreat” was a
cottage very prettily situated in the Third Ward.

母が彼女の「方違え」のために選んでいた場所は、三条に、とても
上品に建てられた小さな家であった。

条坊制にもとづいて整備された「京都」の三条のあたりにあった小家
は、「京都」の一部であることに違いない。しかし、この場所は、「the
Capital」でも「Court」でも「the City」でも、そのいずれでもない。

【J 1】 物語本文 東屋巻 下 p.637

程もなう明けぬる心地するに、鳥などは鳴かて大路近き所にお
ほどれたる声して、いかにとか聞きも知らぬなのりをしてうち
群れて行くなどぞ聞ゆる。

【J 2】 ウェイリー英訳 The Eastern House p.1005

It was beginning to grow light, but it seemed that in this part of the
town the dawn was heralded, not by the crowing of cocks, but by
the raucous voices of peddlers crying their wares – if indeed that
was what they were doing, for the noises they made were entirely
unintelligible.

空は薄明るくなってきたが、しかし、都のこのあたりにおいて、夜
明けは、鶏の鳴き声でなく、品物を売ろうと叫ぶ商人の耳障りな声

で告げられた——もし、じっさいに彼らがそうしているならば。というの、彼らが立てているその騒音は、まったく理解できなかったのだ。

浮舟の住む三条の小家を訪れた薫は、そこで一夜を過ごした翌朝、「the raucous voices of peddlers」（商人の耳障りな声）を聞いた。このあたりに住むひとびとの日常の様子であったのだが、薫にとって、それは、「the noises they made were entirely unintelligible」（彼らが立てているその騒音は、まったく理解できなかったのだ）とあるように、何を売ろうとしているのか、本当に物を売る声であるかどうか、まったく聞き分けることのできない音でもあったという。

たしかに、三条の小家は「京都」にある。しかし、同じ「京都」で生きる薫にとって、そこは、十分に理解することさえできないひとびとの住むところでもあった。そして、「the Capital」や「the City」などと異なる、このような「京都」には、「the town」のことが選ばれているのである。

ところで、この東屋巻にあらわれる三条の小家のありさまは、夕顔巻に描かれた夕顔の住む五条の家のありさまと類似する⁸。とすれば、三条の小家のある「京都」と、五条の家のある「京都」も、また、似かよすがたをもって立ちあらわれてくるのではないか。はたして、ウェイリー英訳では、これら二つの「京都」は、紛れもなく同じ場所であった。

8 ウェイリーは、*The Bridge of Dreams*. (George Allen & Unwin, 1933) の「INTRODUCTION」において、「… there are many ‘balancing’ scenes, obviously introduced quite deliberately. Thus, the cottage in the Third Ward ‘rhymes’ (if one may put it in that way) with Yugao’s home, and the pedlars whom Kaoru sees setting out at dawn with packs upon their heads correspond to the peasants setting out to work in the Yugao episode.」（多くの「バランスをとる」場面があり、明らかに、まったく計画的に導入されている。たとえば、三条の小家は、夕顔の家と（もしこういふ言い方をすれば、）「韻を踏み」、そして、薫が目にする、頭の上に荷物を載せて夜明けに出発する行商人は、夕顔のエピソードで仕事へ出かける農民に対応する。）(pp.13-14) と述べている。なお、*The Bridge of Dream* は、全六巻に分けられたウェイリー英訳 *The Tale of Genji* の第六巻にあたり、その「INTRODUCTION」は、本稿がウェイリー英訳本文を引用した Tuttle 社版には収められていない。

【K 1】物語本文 夕顔巻 上 p.70

むつかしげなるわたりの、このもかのも怪しううちよろほひて、
むね／＼しからぬ軒のつまごとに蔓ひ纏はれたるを、…

【K 2】ウェイリー英訳 Yugao pp.52-53

And indeed it was a most strange and delightful thing to see how on the narrow tenement in a poor quarter of the town they had clambered over rickety eaves and gables and spread wherever there was room for them to grow.

そして、じっさい、都の貧しい一画にある狭い住まいで見るとも奇妙で愉快なことは、それらが、壊れかかった軒と破風の上に這い上り、育つことのできる余地があるところならどこへでも広がっていくことだった。

密かに六条御息所のもとへかよっていた源氏は、その途上、乳母を見舞おうと五条のあたりを訪れ、そこで、夕顔の花があちこちへ咲き広がっている家を見つける。五条は、いうまでもなく、「京都」にあるわけだが、ウェイリー英訳において、「a poor quarter of the town」（街の貧しい一画）とあらわされ、「the Capital」や「the City」でなく、「the town」が用いられている。

この「the town」には、「rickety eaves and gables」（壊れかかった軒と破風）の住まいが建つ。さらに、その場所は、次のような様子でもあった。

【L 1】物語本文 夕顔巻 p.81

隈なき月かげに、ひま多かる板屋、のこりなく漏り来て、見ならひ給はぬ住居のさまも珍しきに、…

【L 2】ウェイリー英訳 Yugao p.61

The light of an unclouded full moon shone between the ill-fitting planks of the roof and flooded the room. What a queer place to be lying in thought Genji, as he gazed round the garret, so different from any room he had ever known before.

雲ひとつない満月の光が、すきまの多い屋根板のあいだから輝き、部屋を満たした。横になっているとなんて妙な気分のする場所なんだ、源氏は、みすぼらしい小さな部屋をじっと見まわしながら、彼がこれまで知っていたどんな部屋とも異なっている、と考えた。

浮舟の三条の小家が、薫から遠く離れた場所にあったことと同じように、夕顔の五条の家もまた、見苦しく、無秩序に荒れはて、源氏が知っているどのような家の様子とも異なっていた。如上の「京都」の風景は、「the Capital」や「the City」が包括するありさまと、大きく違っている。だからこそ、ここは「the town」であったのだと、ひとまずは、理解しておくことができるだろう。

ところが、「the town」は、浮舟の三条の小家や夕顔の五条の家のある場所にとどまらない。

【M1】物語本文 松風巻 上 p.422

末の世に思ひかけぬこと出でてなむ更に都のすみか^{もと}覓むるを、俄にまばゆき人中いとはしたなく、田舎びにける心地もしづかなるまじきを、…

【M2】ウェイリー英訳 The Wind in the Pine-Trees p.344

After our long absence from the Court we should feel utterly lost and bewildered were we to plunge straight into the bustle of the town, …

宮中から長く離れていたあと、わたしたちが、そのまま、都の喧騒のなかに飛びこんだとしたら、まったく途方に暮れ、そして、当惑してしまうし、…

源氏が明石の君を二条東院に迎え入れようとするのに対し、父の明石の入道は、大堰の山荘へ住まわせることに決める。それは、播磨守の娘として明石で暮らしてきた明石の君が、突如として、「京都」の一員になることを案じての措置であった。その明石の君が向かう二条東院のある「京都」が、「the town」のことばとともにかたられている。

また、次に掲げるのは、中の君を訪ねて宇治へ向かった匂宮が、宇治の山里を眺めて、賛嘆の思いを抱く場面である。

【N 1】物語本文 総角巻 下 p.466

めなれずもある住居のさまかなと、色なる御心にはをかしく思しなさる。

【N 2】ウェイリー英訳 Agemaki p.880

“How wonderful it would be to live in such a place!” thought Niou, sensitive as he was to every kind of beauty and utterly unfamiliar with any sights save those of the town.

「このようなところに住んだなら、なんて素晴らしいことでしょう！」と、あらゆる種類の美しさに敏感で、そして、**都**の光景を除いたどんな光景もまったく見慣れていない匂宮は考えた。

匂宮は、いつも目にしていた「the town」の風景を除けば、あらゆる風景に無知であり、だからこそ、宇治の光景に驚きを覚えたのだ、という。「the town」は、匂宮が慣れ親しんでいた日常の風景であり、もちろん、「京都」の景色でもある。

源氏の暮らす二条東院や、普段から匂宮の眺めていた場所が華やかなところであるいっぽう、三条の小家や五条の家のあたりは、源氏や匂宮とは明らかに対照的な、貧しく、猥雑なひとびとが生活する場所であった。しかし、そのいずれもが、「the town」と表現されている。そこには、身分や属性は違っていても、それぞれにとっての、日常の空間とし

での「京都」が立ちあげられている、と読める。「the Capital」でも「the City」でもない、「the town」として、ウェイリー英訳が選びとったことばの世界がある。

◆7 「Kyoto」ということば

ここまで見てきたように、ウェイリー英訳のなかの「京都」は、「the Capital」「Court」「the City」、そして、「the town」といったことばたちによって形づくられていた。それらは「京都」でありながらも、個々に異なる像を浮かびあがらせ、「京都」を、単純に固有の場所として定めていくことを拒むものであった、と捉えられる。そこは、「京」でも、「都」でもない。「the Capital」「Court」「the City」「the town」を統合する、ウェイリー英訳のなかで、新たな創造された「京都」なのだ。

ところで、自明のこのようにも思われるが、これらのことばによってあらわされるウェイリー英訳の舞台が、たしかに「京都」であったことも、いまいちど、確認しておこう。すなわち、「Kyoto」ということばもまた、用いられているのである。

【01】物語本文 明石巻 上 p.323

京のかたのことと思せばいぶかしうて、御前に召し出でて問はせたまふ。

【02】ウェイリー英訳 Akashi p.254

… his news came from Kyoto, from the City, and that in itself was enough to make Genji catch eagerly at every word.

… 彼の知らせは、京都から、都から来たのであり、そして、それはそれじたいで、源氏を心の底からすべてのことばへとびつかせるには十分だった。

「京都」を離れてひさしい源氏が、「京都」からの知らせに強い関心を

示すところである。ウェイリー英訳は、狂喜する源氏の様子を、「from Kyoto」「from the City」と立てつづけに書くことで描こうとしているのだろう。ここからは、ウェイリー英訳に「Kyoto」ということばが用いられていたことに加え、「Kyoto」が、「the City」と、大方、同じ意味であることも知ることができる。

しかし、この「Kyoto」は、ウェイリー英訳のどこにでもあらわれるわけではない、極めて限定されたことばのように見える。

【O】は、明石巻にあった。明石巻には、【O】と同じく、使者が「京都」の様子をかたるくだりにもう一例があり、あわせて、二例の「Kyoto」が見いだされる。また、玉鬘巻にも、六例の「Kyoto」があり、どうやら、玉鬘を「京都」に戻そうとする叙述のなかで用いられていることが多いようだ。しかし、こうしたことよりも、むしろ、ウェイリー英訳のなかの「Kyoto」は、注記のなかにあらわれることがいっそう顕著である、という特徴が指摘できる。

【P】ウェイリー英訳 The Sacred Tree p.194

Meeting Hill: "Osaka" means Hill of Meeting; a gentle slope on the road from Kyoto to Otsu.⁹

逢坂山：「逢坂」は、会う丘を意味する。都から大津へ向かう道にあるなだらかな坂道のこと。

【Q】ウェイリー英訳 The Bridge Maiden p.804

Uji: About eleven miles south of Kyoto.

宇治：都の南へ約 11 マイルにある。

このような注記のなかの「Kyoto」は、全体で十一例に及んでいる。「Kyoto」は、しばしば、注釈的な様相を示すのである。「the Capital」や「Court」「the City」「the town」が、物語の内部に立ってかたられる

9 本文中の語句を掲げ、次いで、注記を示した。

ものであるいっぽうで、「Kyoto」は、物語の外部から説明しようとするときに見いだされてきた、ともいえようか。

◆8 「京都」とその外国語訳のあいだから

ウェイリーの英訳による *The Tale of Genji* というひとつの物語から、「京都」を糸口に見つめながら、源氏物語のすがたを捉えようと試みてきた。

源氏物語のなかにあらわれた「京都」は、「京」であり、「都」でもあった。それじたいは、「the Capital」とも「the City」とも訳することができることばといえる。しかし、ウェイリーは、*The Tale of Genji* のなかで、この「京都」をあらわすため、「the Capital」「Court」「the City」「the town」「Kyoto」ということばを選び、複雑な「京都」のすがたを示してみせた。もちろん、それは、【B】で「京」を「the Capital」と訳し、【D】で「都」を「the Capital」と訳すなど、物語本文における「京」「都」の使い分けが、そのまま、反映されているという、短絡的な姿勢ではない。【C】や【H】などのように、物語本文に「京」「都」が用いられていないにもかかわらず、これらのことばがあらわれるばあいもある。物語本文では、「京」「都」という二つのことばによってかたられていた「京都」が、ウェイリー英訳のなかで、異なることばとして生まれかわっている、ということだ。ウェイリーによって新たに創造された「京都」を舞台にした、ウェイリー英訳の源氏物語の世界が立ちあらわれているのである。

ところで、ウェイリー英訳とは異なるケース、たとえば、サイデンステッカー英訳やタイラー英訳のありかたも気にかかるであろう。じつは、これら二つの英訳における「京都」は、ウェイリー英訳ほどのバリエーションを見せない。あらすじや注記を別にすれば、サイデンステッカー英訳は、わずかに「the capital」を用いることがあるものの、ほとんどを「the city」として表現するし¹⁰、タイラー英訳にいたっては、

10 たとえば、【L】に対応するところを「Though the cherry blossoms had already fallen in the city, it being late in the Third Month, …」（桜の花は、都では

「the City」のみが用いられている¹¹。それぞれの英訳が「京都」をどう表現しようとするかは、それを書記するものにかかっている。だから、「京都」の表現が揺れるのだし、同時に、サイデンステッカー英訳にも、タイラー英訳にも、固有の物語世界があることを指し示している、ともいえるだろう¹²。

このことはまた、あるひとつの写本には、あるひとつの写本なりの世界があることと、よく似ている¹³。保坂本の世界、陽明文庫本の世界などというように、ウェイリー英訳が、サイデンステッカー英訳が、タイラー英訳が、それぞれがそれぞれの源氏物語の世界を形づくっている。その一つひとつが異なり、その一つひとつが源氏物語なのだ。

源氏物語が読まれ、書かれるなかで、あるいは、異なることばに翻訳されるなかで、源氏物語は変貌していく。わたしたちのまえに置かれ、わたしたちが読む源氏物語も、こうした、変貌した源氏物語のひとつであるに違いない。本稿は、そのすがたを、ウェイリー英訳のなかの「京都」という、たったひとつのことがらから捉えたに過ぎない。あるいは、他のことばでは、どのようになっているのだろうか。ウェイリー英訳ではなく、与謝野晶子訳ではどうか。『新編日本古典文学全集』や『あさき

すでに散っていたけれども、三月の終わりのことなので、…）(p.84) といい、須磨巻で、太宰大弐が上京の途上に源氏を見舞うところを「The assistant viceroy of Kyushu was returning to the capital.」（九州の次官が都に戻ってきていた。）(p.238) とする。

11 たとえば、【L】に対応するところを「The blossoms in the City were gone now, since it was late in the third month, …」（三月の終わりのことだったので、いまや、都の花は散ってしまって、…）(p.82) とする。

12 英訳以外に目を向けてみれば、ルネ・シフェールの仏訳では、「la villa」「la capitale」などのバリエーションがあり、主に「la villa」が用いられている。また、庄婕淳氏のご教示によれば、豊子愷の中国語訳では、「京」「京都」「京城」「京華」「神京」など、林文月の中国語訳では、「京」「京城」「京都」「都城」などのバリエーションがある、という。

13 伊井春樹氏『源氏物語論とその研究世界』第二章第六節「保坂本源氏物語の表現—「けはひ」と「けしき」—」（風間書房、2002／初出・『詞林』20、1996.10）、同第三章第九節「陽明文庫本『源氏物語』の方法」（初出・『国語国文』62(1)、1993.1）ほか参照。

ゆめみし』を読んでみてもよいだろう。ウェイリー英訳を日本語に訳し
もどした、佐復秀樹氏による『ウェイリー版源氏物語』も、「the City」
を「都」とすることが多いなかで、たとえば、【G】の「the City」を「街」
とするなど、面白い（3巻 p.595）。源氏物語にかかわる、さまざまな
外国語訳や現代語訳、諸注釈書、写本たちは、いったい、どのような世
界を示してくれるのか。そこには、変貌した源氏物語の世界を読む愉快
が、たしかに存在する。

付記

源氏物語の英訳は、以下に依り、引用にさいしては、巻名・頁数を示し、
私にゴシック・波線・傍線を施した。

ウェイリー英訳 Arthur Waley, *The tale of Genji: The Arthur Waley translation of Lady Murasaki's masterpiece with a new foreword by Dennis Washburn*. (Tuttle, 2010)

サイデンステッカー英訳 Edward G. Seidensticker, *The Tale of Genji*. (Tuttle, 2007)

タイラー英訳 Royall Tyler, *The Tale of Genji*. (Penguin Books, 2003)

また、読解の便宜をはかり、日本語訳も付しておいた。なお、本稿の骨
子である「京都」を指すことばの日本語訳は、「都」に統一したが、置
き換え可能であることを意味しない、と付言しておく。

(立命館大学助教)

ベーネル訳『源氏物語』における和歌の翻訳 —英訳・仏訳との比較から—

常田 槇子
(つねだ まきこ)

◆1. はじめに

海外での『源氏物語』受容を考える際、アーサー・ウェイリーの仕事は極めて重要であろう。特にイギリスのみならず、ヨーロッパ各国で重訳が出され、『源氏物語』を日本古典の名作として知らしめる役割を果たしたという点において、ウェイリー訳は非常に強い影響力をもった翻訳であった。しかしその一方で大胆な自由訳と評されるがごとく、ウェイリーの独創的な解釈も多く含まれており、しばらくするとウェイリーの仕事を批判的に見直そうとする『源氏物語』の新たな完訳が刊行されるようになる。オスカー・ベーネル (Oscar Benl, 1914-1986) は1966年に *Die Geschichte vom Prinzen Genji*¹ を上梓した。ウェイリー訳以後、ヨーロッパ圏においてはベーネル訳が初めての完訳であり²、同書は原文に忠実であることを意識した翻訳になっている。ベーネル訳はこれまで広く流布してはいなかったが³、2014年10月に新たに再版されることが決まっております⁴、それは今なおその仕事が評価されていること

1 Hofdame Murasaki, *Die Geschichte vom Prinzen Genji*, übersetzt von Oscar Benl, Zürich, Manesse Verlag, 1966 (本稿でのベーネル訳の引用は1992年の再版本による。)

2 ちなみに豊子愷訳 (中国語) は、1961年から1965年にかけて完成されたが、実際に出版されたのは、1980年から1983年にかけてであった。

3 ユディット・アロカイ「ドイツ語圏における『源氏物語』受容と翻訳の問題」、p127-146 (京都大学大学院・文学研究科編『世界の中の『源氏物語』: その普遍性と現代性』臨川書店、2010)

4 Murasaki Shikibu, *Die Geschichte vom Prinzen Genji*, übersetzt von Oscar Benl, Zürich, Manesse Verlag, 2014

を意味しよう。

ベーネルは、1914年にニュルンベルクに生まれた。法学部を卒業後、中国文学を経て、日本文学に興味を抱くようになる。1937年から1940年まで東京帝国大学で学び、1941年から1944年までハンブルク大学日文学科の助教授を務めた。1944年からは東京のドイツ大使館の通訳を務めたが、1947年に帰国し、1948年にミュンヘン大学で教授資格を取得すると、その後は1983年の退官までハンブルグ大学で教鞭をとった。『源氏物語』や『伊勢物語』といった古典文学だけでなく、谷崎潤一郎や川端康成など近現代の作家についても翻訳している⁵。

さて、前述したように、ウェイリー訳との最大の相違点は、ベーネル訳が原文に極めて忠実であることにあり、深田甫氏は書評の中で次のように述べている⁶。

氏は故池田亀鑑氏の励ましに謝意を表わしているが、池田氏の解釈を採用しているわけではない。それのみか国文学界の定説すら無視してドイツ語の筆をすすめている箇所もすくなくないが全般的には岩波版古典大系の山岸徳平氏による校註をこなしている節が濃厚である。それよりもむしろウェイリー氏の訳業の修正に力を注いでいるようにみえ、ドイツには末松謙澄氏の英訳からの重訳ミュラー＝ヤーブシュのもの（一九一）やウェイリー氏からの重訳ヘルリチュカのもの（一九三七）がすでにあるが、それらを遙かにこえて原典に近づいている。

5 前掲3ユディット・アロカイ論文を参考にまとめた。なお、同書には「Oscar Benlはドイツ語でオスカー・ベーネルと発音するが、仮名書きではオスカー・ベネルという形が使われている。」との指摘があり、本稿ではこの記述を踏まえて、Benlを「ベーネル」と記している。

6 深田甫「オスカー・ベネル著 Genji-Monogatari: Die Geschichte vom Prinzen Genji.」、p118-122（『文学』35、岩波書店、1967）。（なお、深田氏は「国文学界の定説すら無視して」と述べるが、ベーネル訳の具体的な該当本文は挙げていない。）

また、鈴木達哉氏も、訳文の性格について次のように言及している⁷。

……ベンル氏の訳文は、一言で述べれば、「原文に忠実な正確な訳である」ということになるであろう。

そしてしかも実に読み易い文章である。(中略)……ベンル氏の態度は「学者的」で、一字一句をもゆるがせにしない厳格な姿勢が見られる。

ベーネル訳の訳文そのものについては、これまでほとんど論じられてこなかったが、ベーネル訳には他の翻訳とは異なる訳出もあり、優れた解釈を示していると思われるものも確認できる。本稿では主要な英訳・仏訳と比較することで、ベーネル訳の特色を明らかにしてゆきたい。特に訳出上の困難が伴うであろう和歌の翻訳に注目し、ベーネル訳の工夫について取り上げる。掛詞をできるだけ訳に反映させようとする姿勢や、表面的な訳ではなく、和歌の内容を十分に踏まえた上での訳出など、注釈書が現代ほど充実しているとは言いがたい時代に、原文を十分に読み込んだ上で翻訳していることが明らかになる。また、そのような訳出によって描き出されたベーネル訳の作品理解についても、あわせて検討したい。

◆2. 掛詞の解釈

まずは、掛詞の解釈について検討するが、その前にベーネルの利用した注釈書について簡単に言及しておきたい。1956年に刊行されたホルスト・ハミツチュと共編の *Japanische Geisteswelt*⁸ (邦訳：日本の精神世界) の中で、『源氏物語』について「Eine neue, vollständige

7 鈴木達哉「ドイツ語訳『源氏物語』について」p79-92 (『智山学報』20、智山勸学会、1972)

8 Oscar Benl und Horst Hammitzsch, *Japanische Geisteswelt*, Zürich, Baden-Baden, 1956

Übersetzung bereitet (新版完訳を準備中)」と記していることから、ペーネルは翻訳に10年以上取り組んでいたことがわかる⁹。なお、深田氏の指摘されるように、日本古典文学大系(以下「旧大系」とする)を利用している可能性は極めて高いと思われるが、同書が刊行されるのは1958年以降である。旧大系を利用できるようになった時期に、翻訳がどこまで進んでいたのかは定かでないが、少なくとも2年以上は別のテキストを参照しながら翻訳を進めていたことが推察される¹⁰。

ペーネルは和歌の翻訳にはこだわりがあったようで、母音の数ができるだけ5・7・5・7・7になるように訳出している。また、原文に極めて忠実でありながらも、新しい解釈の可能性を示したものも含まれている¹¹。紙幅の都合があるため、本稿では空蟬をめぐる物語(「帚木」～「夕顔」巻)に焦点をしばり、検討してみたい。

まず、「帚木」巻で、空蟬との思いがけない逢瀬からしばらくして、源氏が空蟬に贈った和歌である。

【本文①】

見し夢をあふ夜ありやと嘆くまに目さへあはでぞ頃もへにける

9 同書にこのような記述があるということは前掲6深田書評にも言及がある。

10 この点に関しては、例えば「帚木」巻の和歌「琴の音も月もえならぬ宿ながらつれなき人をひきやとめける」(定家本系多数の本文、旧大系本も同じ)の「月」がペーネル訳では「菊」と訳出されている点が参考になろう。なお、河内本系諸本では「菊」になっており、ペーネルが1947年に日本を離れる前に入手できたであろう注釈書類をみると、「菊」を採用しているものも複数見受けられ、特定はできない。また、中村真一郎が当該箇所について母音数を合わせるための工夫であると述べている(角田文衛・中村真一郎『おもしろく源氏を読む』朝日出版社、1980)ように、ペーネルの利用した注釈書の検討には慎重になるべきである。ひとまず、留意すべき点として上記の異同について言及しておく。

11 この点に関して、桐壺更衣の詠んだ和歌「限りとて…」の翻訳方法を、拙稿「ミシェル・ルヴォンによる『源氏物語』フランス語訳の試み」p65-76(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』59、2014)の中で取り上げた。現在、同歌の掛詞の解釈は大きく二通りあるが、「命の道」という解釈を示したのは、管見の限り、日本の注釈書も含めてペーネルがその初出である。

〔① p.101〕¹²

当該和歌の主要な英訳・仏訳の翻訳は、以下の通りである（なお、紙幅の都合上、以下改行はスラッシュ記号で示している。また下線および引用の後ろに付した日本語訳は、稿者によるものである）。

【バーネル訳①】

Noch klage ich / ob eine solche Traumnacht / je wiederkomme,
/ und so vergehet Zeit, / ohne daß je ich Euch sähe. 〔① p.72〕
（そのような夢に満ちた夜が／再びやって来るかどうか／嘆いているうちに／あなたに会えず／時間が経つのです。）

【ウェイリー訳①】

'Would that I might dream that dream again! Alas, since first this wish was mine, not once have my eyelids closed in sleep.'〔① p.44〕¹³
（あの夢をもう一度見たいのです。ああ、最初にそう願ひ、そのときから一度もまぶたを閉じて眠ることはありませんでした。）

【サイデンスティックァー訳①】

I yearn to dream again the dream of that night. / The nights go by in lonely wakefulness. 〔① p.45〕¹⁴
（あの夜の夢をもう一度夢にみたいと強く願っています。／孤独で眠れないまま幾夜も経っています。）

12 前述したように、バーネルの使用したテキストには課題もあるが、本稿では、主に利用したとされる旧大系（岩波書店）を用い、一部私に表記を改めている。

13 本稿での引用は Lady Murasaki, *The Tale of Genji*, translated by Arthur Waley, Tokyo, Charles E. Tuttle Company, 1970 による（ウェイリー訳の初版は1925年刊行）。

14 本稿での引用は Murasaki Shikibu, *The Tale of Genji*, translated by Edward G. Seidensticker, Tokyo, Charles E. Tuttle Company, 1976 による。

【シフェール訳①】

Une nuit peut-être / verrait s'accomplir mon rêve / à gémir ainsi
/ sans jamais fermer les yeux / j'ai laissé couler le temps

〔① p.47〕¹⁵

(おそらくある夜／私の夢は現実のものとなるでしょう／そんなふう
に嘆いていて／私の目は決して閉じることなく／私は時が流れる
のにまかせていました。)

【タイラー訳①】

Even as I mourn not knowing whether that dream means another
night, / endless time seems to go by while my eyelids never close.

〔p.42〕¹⁶

(あの夢が別の夜を意味しているかどうかかわからず、たとえ私がそ
のことを嘆いたとしても／果てしない時間が過ぎ去って行くように
感じられ、その間私のまぶたは決して閉じないのです。)

当該和歌の「見し夢をあふ夜ありやと」の「あふ」については従来「夢
があふ」と「男女が逢ふ」の掛詞であることが指摘され、「目さへあはで」
の「あふ」は、上の句の「あふ」に照応するものだと説明されている。
ただし、「目さへあはで」という部分については、「まぶたが合う」の意
味のみで解している注釈書も散見し、本稿で取り上げている主要な翻訳
書においても、「まぶたが合う」の意味で翻訳されている¹⁷。ペーネルは
実際に会わないという意味で訳出しているが、和歌に続く源氏の台詞「寝
る夜なければ」の方で眠れないという意味を訳出しているため、全体と

15 本稿での引用は Murasaki Shikibu, *Le Dit du Genji; magnificence*, traduit par René Sieffert, Paris, Publications orientalistes de France, 1988 による。

16 本稿での引用は Murasaki Shikibu, *The Tale of Genji*, translated by Royall Tyler, New York, Penguin Books, 2003 による (タイラー訳の初版は 2001 年刊行)。

17 なお、旧大系には、その頭注に「(現実に逢わないばかりか) 物思いで目まで合わず (眠られず) して」とある。

してみると他の翻訳と内容上大きな違いはない。ただ、和歌の方では源氏と空蟬が会っていないとすることで、二人の関係を明確に示していると言える。

続いて取り上げるのは、「空蟬」巻で、源氏からの和歌に対し、返歌というわけでもなく、空蟬が独り詠んだ和歌である。

【本文②】

空蟬の羽におく露の木がくれてしのびしのびに濡るる袖かな
〔① p.120〕

各翻訳者の訳は以下の通りである。

【ベーネル訳②】

Wie auf der Zikade / Flügel der Tau nicht sichtbar / im
Baumesschatten, / werden mir heimlich Verliebtem / tränennaß,
ach, die Ärmel. 〔① p.88〕
(蟬の羽の上／にある露のように／木の陰で見えなくて／恋をして
いる私は、嗚呼／密かに涙で袖を濡らすでしょう¹⁸。)

【ウェイリー訳②】

[---] a poem in which she said that her sleeve, so often wet with
tears, was like the cicada's dew-drenched wing. 〔① p.53〕¹⁹
(彼女が、涙でよく濡れる自分の袖が、露で濡れた蟬の羽のようだと詠んだ詩)

18 ベーネル訳の nicht sichtbar のニュアンスは後半部分にもかかっていると読める。

19 ウェイリーは、当該和歌について、その内容を伝えるにとどめ、詩の形式では翻訳していない。

【サイデンスティックカー訳②】

The dew upon the fragile locust wing / Is lost among the leaves.

Lost are my tears. 〔① p.56〕

(はかない蝉の羽の上にある露は／葉の中で姿が見えなくなります。
私の涙も見えません。)

【シフェール訳②】

La rosée tombée / sur ses ailes la cigale / cache dessous l'arbre

/ ainsi fais-je de ma manche / trempée de larmes secrètes 〔 ①

p.60〕

(蝉の羽の上に／落ちる露は／木の下の方で隠れています／こんな
風に私は自分の袖を／密かな涙で濡らしているのです。)

【タイラー訳②】

Just as drops of dew settle on cicada wings, concealed in this tree,

/ secretly, O secretly, these sleeves are wet with my tears. 〔p.52〕

(蝉の羽の上に置く露の滴のように、木に隠れて、／こっそりと、
嗚呼、ひそかに、袖は私の涙で濡れているのです。)

「しのびしのび」の解釈について、諸注「密かに」という意味で見解は
ほぼ一致しており²⁰、ベーネル以外の翻訳者もそのように訳している。
一方、ベーネルは下線部のように「恋をしている私」と訳した。ここでベー
ネルの師であった池田亀鑑が、当該箇所について、「蝉の羽に置く露が
木にかくれて見えないように、私の袖は君を思って忍び忍びに涙にぬれ
ることである」²¹と解している点には留意する必要があるだろう。「君を
思って」という解釈は、「忍び忍び」だけでなく、「偲び偲び」の意をも

20 旧大系の頭注には「蝉の羽に置く露が木に隠れて見えないように、私も源
氏の君からは隠れてその御情の露を受け、人知れず涙で濡れる私の袖なのであり
ますよ。」とあり、従来の説ともベーネルの解釈とも別の解釈を示している。

21 『日本古典全書 源氏物語 1』池田亀鑑校注、朝日新聞社、1946年

汲み取ったものであろう。空蟬は当該和歌の直前、源氏の「浅はかにもあらぬ御気色」を「ありしながらの我が身ならば」と回想していた。この仮定文の結語は示されていないため、「偲ぶ」の意を読み取る余地も残されている。結果としてベーネル訳では、源氏を恋しく思いながらもその関係を発展させることのできない切ない空蟬の想いがはっきりと描かれている。

◆3. 比喩を含む和歌の翻訳

続いて、比喩を含む和歌の例として、「夕顔」の巻で伊予国に下る前に、小桂を返された空蟬が、源氏に贈った返歌を取り上げる。

【本文③】

蟬の羽も裁ち変へてける夏衣かへすを見てもねは泣かれけり

〔① p.174〕

各翻訳者の訳文は、以下の通りである。

【ベーネル訳③】

Da Ihr dieses Gewand, / dünn wie ein Zikadenflügel, / zum Winter
schicktet, / erkenne ich weinend, / daß Ihr mich vergessen habt.

〔① p.135〕

(蟬の羽のように薄い／この衣を／あなたが冬に向けて送ってきた
ので、／あなたが私のことを忘れてしまったのだとわかり／泣いて
います。)

【ウェイリー訳③】

'That to the changed cicada you should return her summer dress
shows that you too have changed and fills an insect heart with
woe.' 〔① p.80〕

(姿を変えた蟬に夏の衣を返すというのは、あなたも変わったという
ことであり、虫の心を悲哀でいっぱいにします。)

【サイデンスティックカー訳③】

Autumn comes, the wings of the locust are shed. / A summer robe
returns, and I weep aloud. [① p.83]

(秋が来て、蟬の羽は脱ぎ捨てられます。／夏の衣は返され、私は
声を上げながら涙を流します。)

【シフェール訳③】

L'aile de cigale / retaillée et transformée / en robe d'été / me
voir ainsi retournée / mes larmes a fait couler [① p.91]

(夏の衣に／切り直されて形を変えられた／蟬の羽が／私のもとに
返されて／涙が流れてきました。)

【タイラー訳③】

Now cicada wings are cast off and we have changed out of summer
clothes, / I cannot help shedding tears, seeing this gown back
again. [p.79]

(今や蟬の羽は脱ぎ捨てられ、夏の衣から着替えられます。／この
衣が返されるのを見て、私は涙を流さずにはられません。)

当該歌の「夏衣をかへす」という部分には源氏の心変わりが喩えられて
いる。ウェイリーは changed を二度用い、蟬の変化に源氏の変化を重
ねてみているが、バーネルは、源氏が空蟬のことを忘れてしまったとす
ることで、二人の関係にまで踏み込んだ訳出となっている。衣を返すとい
う行為が意味するところも、和歌の中で具体的に明らかにしているとい
う点において、他の翻訳書との差異が認められる。

◆4. むすび

以上、光源氏と空蟬とのやりとりが語られる部分に焦点を絞り、ベーネル訳が他の翻訳者と違う解釈を示している例をいくつか検討してきたが、これらはいずれも掛詞、喩えなどの修辞をベーネルが的確にとらえた上で、それを訳出に活かしている例であった。このような掛詞や喩えの含まれた翻訳しにくい部分の訳し方を検討してみると、ベーネルの描く『源氏物語』世界の一端が明らかになってくるのではないだろうか。すなわち、①の源氏の和歌において「目さへあはで」は、源氏が眠れないのではなく、二人が目を合わさなかった（会えなかった）と訳し、②・③の空蟬の和歌では、源氏を恋しく想う切ない空蟬の心や源氏のはっきりとした心変わりが訳出されていた。原文がそれぞれの胸の内を吐露するような和歌であるのに対し、ベーネルの和歌の訳出では、空蟬の心情、あるいは光源氏と空蟬の関係がより明確に見えるような解釈が積極的にとられている。それにより、ベーネル訳の空蟬をめぐる物語は、その輪郭がはっきりと示された訳になっていると言えよう。わずか数首の歌から判断するのは早計にすぎるとは思うが、このような検討からはわずかであるが、ベーネル訳の特色が見いだせると思われるのである。

(日本学術振興会 特別研究員 (DC2) / 早稲田大学大学院博士後期課程)

Traduttore traditore — イタリアが恋に落ちた『源氏物語』 —

イザベラ ディオニシオ

翻訳論において、必ずといっていいほど引用されているイタリアの諺に、「Traduttore, traditore」があります。二つの言葉を往ったり来たりする<翻訳者 (traduttore)>は、結局どちらの側にも信義を貫けない<裏切り者 (traditore)>であるというのがその慣用句の意味ですが、同じ語源から派生していると言われる tradurre (訳出する)と tradire (裏切る) という二つの動詞が掛けられており、その語呂合わせは翻訳者泣かせの表現を作り上げています。日本語では通常<翻訳者は反逆者>と訳されているようですが、権力などに逆らって派手な活動を起こしている反逆者にひきかえ、翻訳者による数多くの犯罪行為は闇に葬られることがしばしばあり、原作者が知らないところで行われる密かな殺しがほとんどです。日本が世界に誇る文学傑作『源氏物語』をヨーロッパ言語に訳そうと手にかけて者は、まさに暗闇の殺し屋に似たような覚悟で臨んだことでしょう。

千年以上の時空を超えて現在に至るまで、人々を魅了してきたその作品は、<日本>という文脈なくして語ることはできないほど、その文化に深く根を下ろし、古典という枠組みを飛び越えて、今まさに開花しようとしているサブカルチャーの要素を透かしてみてもできます。うっとりする文体の美しさ、暗示性に富んだ詩的表現、貴重な歴史的価値、そしてなんと言っても人間のむき出しの悪意や欲望、人を殺してしまふほどの嫉妬、心が引き裂かれるような情熱という普遍的な<感情>の全てがそこにある。他方では、能、歌舞伎、和歌、小説、茶道、香道、さらに日本における衣・食・住の様々な面において多大な影響を与えた作品だと認められています。その影響の源は、物語のストーリーそのものより、むしろそこに露呈される美意識に拠るところが大きいと言えるでしょう。

私が『源氏物語』と出会ったのは、今から十数年前、大学一年生のときでした。何の予備知識もなく、ヴェネツィア大学の日本語・日本文学コースを専攻していた私の前に、超えられそうもない高い壁が立ちました。それは伝説の「日本文学Ⅰ」という試験ですが、その参考文献のリストは今思い出しても恐ろしいものでした。古典を中心に、三十数冊の作品、数冊の文学史年表、そして数百枚にも上る論文と記事の大量コピーです。担当の先生があまりにも怖くて、1ページも残さず数ヶ月かけて全ての資料を読んだのですが、もちろんその中には『源氏物語』(全文)のイタリア語訳も含まれていました。当時は1957年出版のアドリアナ・モッチィによる訳しかなく、それは1921年～1933年に6巻に分けて出版されたアーサー・ウェイリーの*The Tale of Genji*をベースに英語から伊訳されたものでした。また、そのバージョンには54巻全ての内容が含まれておらず、「匂宮」から「夢浮橋」までは異なる出版社の出していた訳書になっており、さらにそれにも「紅梅」、「竹河」、「蜻蛉」が訳出されていなかったため、別の翻訳でその三巻を補う必要がありました。一部の資料は既に絶版になっており、インクの出が非常に悪い大学図書館のコピー機で、同級生と手分けしてコピーをとった記憶があります。しかし、そんな無残な姿になっても、『源氏物語』が持っている強い引力に惹きつけられた私は、夜更しして一気に読み切りました。古い翻訳だけあって、日本文化に慣れていないヨーロッパ読者に合わせて様々な箇所がアレンジされていました。源氏の君が馬車に乗って、ズボンを履いて、ときにワインを嗜み、恋人の部屋に忍び込むときにドアや窓ガラスを叩き、カーテンを開けて覗いたりするというような具合でしたが、違和感はほとんどなく、その世界にのめり込んでいました。心の琴線に触れる情景に出会って袖が濡れるぐらい涙を流し、妬まれただけで命を落とすという、儂い雰囲気に含まれている女性が次々と登場し、薄暗い部屋で垣間見た鮮やかな裾を見て、抑えきれない情熱に燃える恋多き男性も多数登場するのですが、その一つひとつのエピソードが醸し出す雰囲気あるいは美意識には、言葉と文化の違いという障害を取り除く力がありました。

前置きが長くなってしまいましたが、海外における『源氏物語』事情をテーマにしている本研究のことを知った瞬間、非常に興味を持ち、さらに外国語に訳されている物を日本語にバックトランスレーションするネイティブ翻訳者の募集を見て、応募せずにはいられませんでした。課題資料は、馴染みのあるアドリアナ・モッティ版と2012年に日本語から翻訳されたマリア＝テレサ・オルシによる新しいバージョンでしたが、該当箇所のコピーをいただくなり、大学時代にタイムスリップしたかのようにワクワクしながらページをめくりはじめました。しかし、心が落ち着かず胸が騒いだのもつかの間、目の前にあるのはかなりの難題であることに気づきました。世に出ることもなく、研究資料の下訳として使われるものとはいえ、やはり母国語ではない言語を操るには限界があり、元のイタリア語の様々なニュアンスはすっと入ってくるのに対し、それを日本語で表現するとなると、はなはだ歯がゆく無力に感じられました。特に日本語にないような表現、接尾辞、単数や複数に代名詞など、翻訳作業が進むにつれて、次々と悩ましい問題に遭遇しました。一つひとつを解決すべく、いつもより深く文章を読み込み、選ばれている言葉や文章構造を注意深くみることにより、そこに現れているそれぞれの翻訳者の姿勢が明確に背景化されていることに気づきました。たとえばそれは、「桐壺」の冒頭から明らかです。

モッティ版：

Alla Corte di un Imperatore (che visse non importa quando) tra le molte gentildonne di Camera e di Guardaroba ce n'era una che, sebbene non fosse di altissimo grado, godeva molto più favore di tutte le altre; così che le Grandi Dame di Palazzo, ognuna della quali aveva segretamente sperato di essere la prescelta, guardavano con scherno e odio la nobiluccia che aveva distrutto i loro sogni. Ancora più amareggiate erano le sue antiche compagne, le dame meno ragguardevoli del Guardaroba.

(いつの時代だったか) ある帝の御世では、大勢仕えていた女御や

更衣の中で、さほど高い身分ではなかったものの、他の女性に比べてとりわけ寵愛を受けていた女がいた。自分こそ帝に選ばれるべき存在だと心の底には思っていた身分の高い女御は、彼女らの夢を壊したその下賤な女を嘲笑し、恨んだ。身分が高くない幼馴染の更衣たちも、その特別扱いの様子をみて、なおさら気分が収まらない。

オルシ版：

Durante il regno di un certo Sovrano, non so bene quale, tra le numerose Spose imperiali e dame di Corte ve n'era una che, seppure di rango non molto elevato, più di ogni altra godeva dei favori di sua Maestà. Le dame di alto rango, convinte com'erano di dover essere le prescelte, la guardavano dall'alto in basso e ne erano gelose. Quelle dello stesso grado o di uno inferiore a maggior ragione si sentivano offese.

どの帝の御世であったか、女御や更衣が大勢仕えていた中に、さほど高い身分ではなかったものの、とりわけ帝の寵愛を受けている女性がいた。身分の高い女御は、自分こそが選ばれるべきだと思いがっており、彼女を軽蔑し、ひどく妬んでいた。同じ身分、またはそれより低い身分の更衣はなおさら気分がおさまらない。

言葉遣いや文体を見てみると、モッティ版のイタリア語は少し古風で重々しい感があります。接続詞や句読点が多く、文章自体もより長く、その構造はやや複雑になっている。また、ウェイリー版から遺伝していると思われませんが、訳者の解釈が大きく表れています。内容については、原文の意味を正しく伝えていますが、具体的に説明しようとするあまり、原文にないようなところを強調し、誇張している傾向が目立ちます。それが使用されている用語を比較すれば一目瞭然です。原文の「我はと思ひあがり給へる御かたがた」を、「心の底には」や「選ばれるべき存在」などという表現を使うことにより、身分の高い女御たちの気持ちを過剰に表現していると言えるでしょう。また、「めざましきものに貶しめ妬

み給ふ」に対しても、「彼女らの夢を壊したその下賤な女を嘲笑し、恨んだ」というふうに、更衣に対する嫉妬や妬みと言う感情を伝えようとして、原文よりも強い表現になっています。モッティ版で使用されている「nobiluccia」という言葉は「nobile(貴族)」に縮小語尾が付加された造語で、軽蔑などの意を込めて用いられていることが明らかです。接尾辞を駆使することによって言葉の持つ従来の意味を変更・強調するというのはイタリア語の特徴だが、やはり翻訳の元となったウェイリー版の「upstart」に比べてみても一味違う表現になっています。

円地文子は『源氏物語』を訳したときに、自らの心境を次のように述べています。

(…) 私は、気を銜ったり、原作を歪曲したりするためにこの加筆を行ったのではない。『源氏』を読んでいる間に、それらの部分に来ると、いつも憑かれたように自分のうちに沸き立ち、溢れたぎり、やがて静かに原文の中に吸収されてゆく感情をそのまま言葉に移して溶かし入れなければいられないままにそうしたのである。(紫式部『源氏物語(巻一)』p7、円地文子訳(新潮社、1978))

ウェイリーの翻訳、そしてそれをベースに作成されているイタリア語版もまた、同じように原作者がその作品に盛り込んだと思われる感情を、文のリズム、強調、言葉の選択によって示そうとしているのではないでしょう。

一方、長年ローマ大学で教鞭を執ってきたオルシの翻訳は、感情移入がほとんど見られず、リズム感があり、軽やかです。下線を施した部分に関してもくどい説明が省略され、表現の処理や強調の仕方がまるで異なり、翻訳手法の違いが感じられます。そこで改めて気づくことが二つあります。

一つは<現代読者>を焦点化する副産物、バイプロダクトとしての翻訳の在り方です。ここでいう<現代読者>は、言語が違う上に、原作とは異なる時代の読者のことを指していますが、その潜在的な存在は翻訳

を大きく左右しています。当たり前ですが、言語はときと共に変化し、進化をとげていく生き物であり、翻訳当時は普通に使われていた言葉が、次世代の読者にとっては古めかしく感じられ、同じ情報を与えることができなくなる可能性があります。原作と時空が異なる文化的背景を持つ読者との間に立つ翻訳者が、その違いをどのように汲み上げ、読者とコミュニケーションをとることができるかが主な問題となります。50年代後半のモッティ版はもちろん、その当時の翻訳スタイルに影響され、想定読者層は大学で日本文化などを学ぶ学生だったと推測されます。一方、オルシ版は日本の学問に精通している学生に止まらず、一般読者に向けた書物です。かくして、翻訳者が比較的無意識に背負っている教養、時代背景などを考慮しつつ、異なる文化の伝達を試みるメディア的な役割を担っているということが明らかです。それ故、時間が経っても原作はありのままの形で楽しめるのですが、自立したテキストではない翻訳は時代と共にアレンジや改版が必要であり、コンテンツの更新は避けて通れない問題です。

もう一つはやはり、海外における日本文化の浸透度の顕著化です。モッティ版が出版されたときの日本文化の認知度はかなり低く、ウェイリー版に影響されているとはいえ、イタリアの読者に合わせて異文化的要素を処理する必要がありました。50年の月日を経て発表されたオルシ版はまるで異なる文脈の中に位置づけされていると言えるでしょう。'80年代から現在にかけて、アニメや漫画を皮切りに大量のコンテンツが輸入され、神秘的でエグゾチックだった日本文化の一部側面が、徐々に一般のイタリア人の日常生活の中に入り込み、親しみやすいものへと変わっていきました。ノーベル賞を受賞した川端康成や大江健三郎の作品はもちろん、吉本ばななや村上春樹といったようなポップなものまで街の書店に並び、特別コーナーが設けられるほどとなり、日本に対して特別な興味がなくとも、その文化的特徴に関する情報は、一般教養の一部としてみなされるようになったと言っても過言ではありません。そして、それと関連しているのですが、オルシによる翻訳が出版されたときに、そのニュースが広くメディアに取り上げられて注目されました。50年

前なら同じように報道されず、脚光を浴びることはなかったでしょう。時代、文化、情報量や教養など、さまざまな様子が深く入り混じっている翻訳者と読者の間に成り立つ＜対話＞である以上、翻訳には常に＜裏切り＞の危険が付きまといます。愛情ゆえの裏切りですが、その責任を担うのは翻訳のプロセスにおいて必要不可欠です。しかし、源氏の君がズボンを脱ぎ捨てて、着物を身にまとい、本来の姿に限りなく近い形で生まれ変わり、イタリアの読者の前に登場できたのは何よりもうれしいことでしょう。

(お茶の水女子大学大学院博士前期課程)

執筆者一覧

伊藤 鉄也

(国文学研究資料館・教授)

高木 香世子

(マドリード・アウトノマ大学・准教授)

須藤 圭

(立命館大学・助教)

常田 槇子

(日本学術振興会特別研究員 (DC2)

／早稲田大学大学院博士後期課程)

イザベラ ディオニシオ

(お茶の水女子大学大学院博士前期課程)

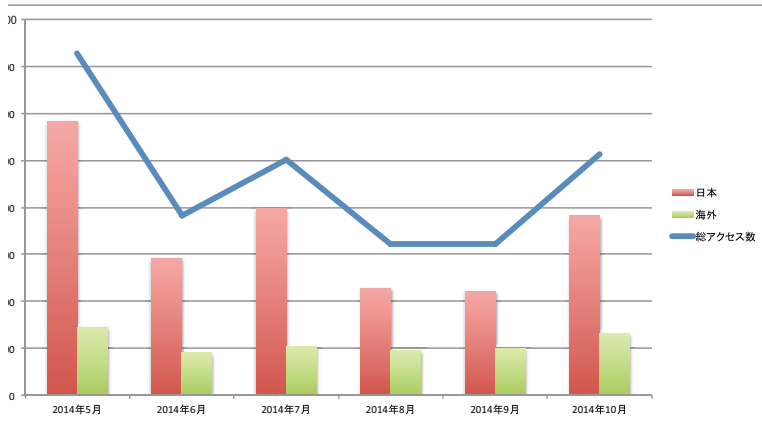


1. 海外源氏情報 (<http://genjiito.org/>) 運用報告

▶ サイト利用状況 (～2014/10)

(1) アクセス数

	2014/05	2014/06	2014/07	2014/08	2014/09	2014/10
総アクセス	3636	1910	2506	1614	1611	2568
(国内)	2910	1457	1988	1140	1107	1912
(海外)	726	453	518	474	504	656



(2) アクセス上位の諸外国

2014/05	2014/06	2014/07	2014/08	2014/09	2014/10
USA(364)	USA(258)	USA(238)	中国 (134)	USA(125)	中国 (160)
イスラエル (89)	イスラエル (26)	ポーランド (23)	USA(112)	ウクライナ (84)	USA(115)
トルコ (40)	トルコ (22)	台湾 (33)	ロシア (50)	ロシア (64)	カナダ (140)
オーストリア (31)	オーストリア (18)	カナダ (28)	ブラジル (32)	カナダ (54)	ロシア (58)
イタリア (29)	イタリア (11)	中国 (26)	ウクライナ (23)	フランス (55)	フランス (55)
ルクセンブルク (29)	ルクセンブルク (24)	オーストリア (24)	カナダ (21)	ブラジル (34)	オーストリア (50)
フランス (28)	フランス (10)	ドイツ (20)	オーストリア (12)	オーストリア (32)	ブラジル (28)
中国 (26)		ウクライナ (19)	中国 (30)	中国 (30)	ウクライナ (15)
カナダ (18)		フランス (14)	ドイツ (11)	ベルギー (16)	
韓国 (16)		韓国 (14)	イタリア (10)		
		ルクセンブルク (14)			
		ロシア (13)			
		ラトビア (12)			

(3) 利用外国数

2014/05	2014/06	2014/07	2014/08	2014/09	2014/10
25	24	27	31	35	29

(4) 報告書等ダウンロード数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
日本古典文学翻訳事典	25	2	0	2	0	1	0
論文(2ファイル)	-	-	1	3	0	0	0

▶現在利用できるサービス・情報

- ・ 科研活動の報告
(本科研の詳細情報、計画のあらまし、研究成果、研究会報告など)
- ・ 最新源氏物語関連情報の更新
- ・ 『日本古典文学翻訳辞典1』のPDFファイル・ダウンロード
(※20131年度研究報告書)
- ・ 源氏物語翻訳史／平安文学翻訳史の公開
- ・ 翻訳－源氏物語・平安文学論文検索機能(※源氏物語のみ実装)
- ・ 論文(PDFファイル)ダウンロード
- ・ 海外－源氏物語・平安文学論文検索機能(※源氏物語のみ実装)
- ・ 『源氏物語』原本データベース
- ・ 『十帖源氏』論文リスト
- ・ 『十帖源氏』原本データベース
- ・ 平安文学関連Webサイトリスト

▶今後追加予定のサービス・情報

- ・ 『海外平安文学ジャーナル』(年2回予定)の発行／ダウンロード
- ・ 翻訳－源氏物語・平安文学論文検索機能、平安文学データ実装
- ・ 海外－源氏物語・平安文学論文検索機能、平安文学データ実装
- ・ 『十帖源氏』対訳ツール

ほか

2. 科研活動記録

2013 年度	
2013/10/20	科研採択
2014/02/03	第 1 回「海外における平安文学」研究会
2014/02/08 ~ 16	ベトナムにおける翻訳資料の調査と研究、打ち合わせ
2014/02/26	第 2 回「海外における平安文学」研究会
2013/02/28	科研ホームページ公開
2013/03/31	『日本古典文学翻訳事典 1 < 英語改訂編 >』発行
2014 年度	
2014/04/16	『日本古典文学翻訳事典 1』ダウンロード開始
2014/04/30	源氏物語翻訳史年表公開
2014/05/14	平安文学関連 Web サイトリスト公開
2014/05/26	『源氏物語』原本データベース公開
2014/06/06	第 3 回「海外における平安文学」研究会
2014/06/07 ~ 08	中古文学会春季大会で『日本古典文学翻訳事典 1』を配布
2014/06/18	論文ファイル (PDF) ダウンロード開始
2014/07/03	海外平安文学研究ジャーナル ISSN 仮番号取得
2014/07/29	海外—源氏物語・平安文学論文検索公開 (124 件)
2014/08/12	平安文学翻訳史公開
2014/08/18	今西科研・伊藤科研合同研究会 (第 4 回研究会)
2014/09/26	国際研究集会「日本古典文学の可能性と異文化の交響」 (於: カナダ)
2014/10/08	『十帖源氏』論文リスト、『十帖源氏』原本データベース公開
2014/10/21	翻訳—源氏物語・平安文学論文検索公開 (324 件)

3. 現在の調査結果 (一部)

翻訳された『源氏物語』の言語数: 32

言語名: アッサム語 (インド)・アラビア語・イタリア語・ウルドゥー語 (インド)・英語・オランダ語・オリヤー語 (インド)・クロアチア語・スウェーデン語・スペイン語・スロベニア語・セルビア語・タミール語 (インド)・チェコ語・中国語 (簡体字)・中国語 (繁体字)・テルグ語 (インド)・ドイツ語・トルコ語・現代日本語・ハンガリー語・ハングル (韓国)・パンジャビ語 (インド)・ヒンディー語 (インド)・フィンランド語・フランス語・ベトナム語・ポルトガル語・マラヤラム語 (インド)・モンゴル語・リトアニア語・ロシア語

◆ 編集後記

『海外平安文学研究ジャーナル』第1号をお届けします。

今号はスタートを飾るにふさわしく、スペイン語・英語・フランス語・イタリア語に関する多彩なラインナップとなりました。対象とする言語の多さだけでなく、新鮮で多角的な視点から考察した原稿が集まったと思います。

今回、最も試行錯誤をした点は、参考文献の明示方法でした。今まで、日本語の文献を扱ってきたものの、外国語で書かれた文献を扱った経験がほとんどなかったからです。「翻訳」を扱った先行研究を調査し、周囲の方の意見も聞きながら進めたことは貴重な経験となりました。このことは今後の課題として、検討していこうと考えています。

最後に、オンラインジャーナルという初めての試みに賛同し、原稿をお寄せくださった方々に、この場を借りてお礼を申し上げます。

(浅川槿子)

惜しくも11月1日・古典の日の発刊とまではいきませんでした。しかし皆様のご協力もあり、11月月内に公開できました。収録された原稿を通じて各国で楽しまれている『源氏物語』の姿に触れ、日本の古典文学が世界で愛されることをうれしく感じながらの編集作業でした。

オンラインジャーナルという新しい試みに取り組んだこともあり、試行錯誤の部分が多く、執筆の先生方には最後までいろいろとご迷惑をおかけしました。この場をお借りしてお礼申し上げます。本号発刊のちは、すぐに第2号の準備に取りかかります。今回の教訓を活かしてスムーズな編集・発行となるように心がけたいと思います。

今後ともよろしく願いいたします。

(加々良恵子)

研究組織

研究代表者

伊藤 鉄也（国文学研究資料館・教授）

研究分担者

海野 圭介（国文学研究資料館・准教授）

野本 忠司（国文学研究資料館・准教授）

連携研究者

マイケル，ワトソン（明治学院大学・教授）

清水 婦久子（帝塚山大学・教授）

荒木 浩（国際日本文化研究センター・教授）

ラリー，ウォーカー（京都府立大学・准教授）

藤井 由紀子（清泉女子大学・准教授）

高田 智和（国立国語研究所・准教授）

研究協力者

高木 香世子（マドリード・アウトノマ大学・准教授）

緑川 真知子（早稲田大学・講師）

須藤 圭（立命館大学・助教）

川内 有子（立命館大学・大学院生）

テレサ，マルティネス（元大阪大学大学院文学研究科・研究生）

庄媿 淳（立命館大学・大学院生）

阿部 江美子（国文学研究資料館・研究員）

浅川 槇子（国文学研究資料館・研究員）

加々良 恵子（国文学研究資料館・補佐員）

科学研究費補助金 基盤研究 (A) 2013 年度研究報告書
「海外における源氏物語を中心とした平安文学及び各国語翻訳に関する総合的調査研究」
課題番号 [25244012] 研究代表者 伊藤 鉄也

海外平安文学研究ジャーナル 1.0

Journal of Heian Literature Research Overseas Vol.1.0

2014 年 11 月 30 日 発行

〈非売品〉

発行所 人間文化研究機構 国文学研究資料館

〒 190-0014 東京都立川市緑町 10-3

電話 050-5533-2900

<http://www.nijl.ac.jp/>

編集兼発行者 国文学研究資料館 伊藤鉄也

<http://genjiito.org/>

(「海外平安文学研究ジャーナル」 <http://genjiito.org/journals/>)

I S S N 2 1 8 8 - 8 0 3 5

© 伊藤鉄也

本書を無断で複写・複製・転載することは
法律で認められた場合を除き禁じられています。